
黒い瞳は角付き

七転八倒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い瞳は角付き

【Nコード】

N5063V

【作者名】

七転八倒

【あらすじ】

成人の儀式、それは神が力とそれを操る術を与える聖なる儀式。元氣一杯！満面の笑顔とピースサインがアヤの元氣印！

アヤは成人の儀式で異界の友を与えられ、神託に挑む。

微妙に常識が違うそんな彼と繰り広げられる、日常と恋と戦いの日々。

ハチャメチャとハラハラにドキドキ。

そんな形容詞に挑んだ話。

序章 A

序章 A

何なんだ、何なんだアレは！？

その日、西日本軍施設が何者かの襲撃の為、阿鼻叫喚の地獄へと姿を変えた。

敵は軍の装甲車を使い、正面玄関に突撃。

完全武装した兵士達がその装甲車を囲み、それで終るはずだった、それなのに。
それなのに。

「ばっ化け物！」

その化け物は一匹。

装甲車の天井が開いたその瞬間。

包囲していた兵士十名の首が一斉に飛んだ。

そして、その鮮血を全身に浴びる者が一人。

軍用品の迷彩服に編み上げのブーツ、最新型の防弾アーマーに弾倉ポーチや手榴弾が装備されたギヤ。

黒い髪が鮮血を浴び赤黒くてかり、目は閉じられているが。

その額に、二本の角。

「ううわああああああ！！」

叫びを上げ、見開かれた瞳は紅いの鬼火が灯る。

施設中の兵士が通路や、階段などでその化け物に応戦するが。

「う、撃て撃て撃て！撃ち続けろ！」

訓練された兵が、恐怖に怯え、ただただ引き金を引き続ける。

一個斑五名の自動小銃が、その恐怖を代弁する様に無茶苦茶に火を吹くが。

「どけ！」

敵は左手を一閃。

その瞬間撃ち出された弾丸が壁に阻まれたかの様に停止し、地面に転がる。

お返しとばかりに敵が右腕に携えていた機関銃が、兵士達を肉の塊に変えて行く。

立ち塞がる者全てを打ち破り、それは地下へ地下へと進んで行く。

そして、ついに。

分厚いゲートを抜け、暗闇から姿を表す。

返り血に赤黒く染まり、両手には屠った兵士から奪った機関銃。

途中、導かれるかのよに、この巨大な白いドームへ突き進んだ。

「出て来い！誘いに乗ってやったぞ！」

その叫びはドームに反響するばかり。

このドームには、彼しかい無い。

だが。

パチパチパチ

何処からともなく響く拍手、後を見ればゲートが閉じていく。

音のする方、天井を見上げると。

丸い円が出現し、ゆっくりとそれが降りて来る。

「いやいや。まさかまさかだね、君が、君が覚せいするとは。いや、嬉しいよ、うん」

そこには病的に白く痩せ細った白衣姿の男と、肩幅も広くぶ厚い筋肉、真っ黒なロングコートに、フードを深くかぶった男。

地面の彼はその姿が見えた瞬間、両手の機関銃をぶち撒ける。

吐き出された弾丸は、白衣の男を食い破らんと襲い掛かるが。

「チィィ！！」

弾丸は白衣の目の前で停止し、地面へと落下して行く。

彼が睨み付ける先。

白衣の隣、ロングコートが前へ出ている。

そいつはそのまま飛び降り、重い地鳴りを轟かせ、地面の彼と正対する。

「いやいや、歓迎、有難う。どうかなイヌイ狗威、僕と一緒に世界を「断る！」

地面の彼、狗威は白衣が言い終る前に叫んだ。

「まあまあ、答えは、どうでも良いんだ。結局は、こうするつもりだった。試作鬼4号、機能試験だ、次世代鬼狗威を攻撃、ああ腕の一二本、構わないよう」

白衣は、薄気味悪い微笑をたたえ。

「さあ、劇の始まり始まり」

打ち鳴らされた合図に、試作鬼4号は猛然と狗威に向かい飛び出した。

序章 B

序章 B

大砲の様に迫り来る試作鬼に、狗威は両手に持った機関銃で応戦する。

「止まれデカブツ！」

機関銃から吐き出される5，56mmの弾丸は、電気鋸の様に試作鬼の身体を襲うが。

「クソ！」

弾丸を一身に受けてもなお突き進む。

止まらぬ敵に、右へ左へと避けるが。

「ふっ、があああ！」

機関銃の弾が切れたその時、そこに一瞬の隙に試作鬼は狗威の懷に潜り込み、強烈な右ストレートが決まる。

咄嗟に機関銃をクロスさせガードするが、後方のコンクリート壁まで吹き飛ばされる。

その衝撃は凄まじく、叩きつけられたコンクリート壁は、半径2m程のクレーターを作り上げた。

一瞬、壁に張り付けられた狗威の口から、大量の黒い吐血。

ガードに使用した機関銃は粉碎され、衝撃を受けた器械部は原型をとどめてい無い。

「ああ、どうした、油断か？ いけない、君ら次世代鬼はこんなもんじゃ無いはずだ、あまりがっかりさせ無いでくれ」

上から観戦している白衣が、吹き飛ばされた衝撃で、砕けたコンクリートの上に倒れた狗威を見る。

試作鬼に顎で合図する。

コンクリート粉が舞う中、試作鬼が狗威に近付き、髪を掴み引き上げる。

その時、不意に試作鬼の背中に何か光る物が生え。

「汚ねえ手で触ってんじゃねえよ」

狗威は左太腿に装備していた大型ナイフで、試作鬼の胸を一突き。ナイフは根元まで食い込み、彼はそれを捻る。

「g u w a a a a a ! !」

「今度はウルセエんだよ」

痛みに雄叫びを上げた試作鬼。

狗威は突き入れたナイフを引き抜き、フードの中に叩き込んだ。

堪らず狗威を放し、たたらを踏む試作鬼に狗威は奇跡的に誘爆しなかった最後の手榴弾を右手に安全ピンを抜く。

喉に突き刺さり、後頭部まで達していたナイフを引き抜いた試作鬼が怒りくるい両手で掴みかかる。

襲い来る左手をバックで避け、突き出された右手。

狗威はレバーを解放した手榴弾を握った右手で、試作鬼の右腕下から捻り込む。

ナイフで抉られた胸の傷口に、手榴弾ごと拳を埋めた。

そして、次の瞬間。

荒れ狂う熱エネルギーと爆風に狗威はまたもや、コンクリート壁に叩きつけられる。

爆炎と黒煙で遮られた先を、彼は苦痛に歪む眼で睨む。

右腕は肩口から吹き飛び、血管と砕けた骨が外気に晒される。

徐々に拡散して行く黒煙の先、

肉の焼ける匂いと化学物質の不快な刺激臭。

そこに、足音が混じった。

狗威は激痛で鈍る体を酷使し、血と肉で汚れ、地面に投げ出されたナイフに飛び付き左手で握る。

切っ先を構え、足音の方向。

薄れた煙に、試作鬼の足が見えた。

「クソ。死んどけよ」

右腕は吹き飛び今だ出血している、武器はこのナイフと右太腿の拳銃。

絶望的な状況の中、敵を睨み付けるが。

不意にその足が止まり、上から大量の血肉が溢れ膝から崩れる。上半身が見事に吹き飛び、下半身のみとなった元試作鬼の肉片がそこに有った。

「素晴らしい、素晴らしいよ狗威。でも、もう終わりだ、残念だ」上から観戦していた白衣が、割れんばかりの拍手を送る。

白衣のポケットから、小さな機械を取り出しスイッチを押した。すると、ドームの扉が開き、そこには。

「まだいやがったのか」

彼が忌々しく睨む先。

扉から進み出て来たのは、四体の試作鬼。

「ささ、どうする、どうする、狗威。今なら、今なら、許すよ。私と行こう」

試作鬼の後ろからは、次々に現れる重武装の兵士達。

壁を背にした狗威の前面に、試作鬼と兵士達の銃口が囲む。

その時、彼の左手の腕時計が小さな電子音を紡ぐ。

その音を聞くと、ニイっと口角を上げ。

「はは、くっくくかあ。わあはははははは！！」

突如天を仰ぎ笑い出す狗威に、兵士や白衣が困惑げに見つめる。

彼はゆっくりと笑うのを辞め、ナイフを鞘に戻し。

左手を突き出し、開いた指を一本ずつ折り曲げる。

5 ? 4

「なんの、なんのつもりだ」

白衣の困惑した顔には、嫌な予感が冷や汗と共に 流れる。そして、

3 ? 2 ? 1

「ボン！」

狗威の暗い笑みと共に、握った手をパッと放したその時。

ドームを揺るがす大きな揺れ、そして何かがドームを外側から突き

破り顔を出し。

大爆発が炎と爆風でドームを蹂躪する。

序章C

序章C

コンクリートが散乱し、壁材や天材が剥がれ落ち下にいた兵士や試作鬼達を押し潰す。

炎が酸素を食って行く。

瓦礫に飲まれ、広大なスペースを誇ったドーナツが。
今や残骸と炎が燦るゴミの山。

そんな山に、爆発で叩き落されながらも、奇跡的に生き残った白衣が身体を震わせながら仰向けに横たわる。

「バンカーバスターだと、何処でそんな物を」

「お前が行かせた米軍基地だ」

「な！ぐわああああ！」

白衣の隣に、何時の間にか歩み寄っていた狗威が立ち。

左手に握った鉄の棒を、白衣の左手の平を地面に縫い付ける。

だが彼も無事では無い、破片が突き刺さった左目、潰れて引き摺る右足。

「俺達は、祖国の為に戦った。なのに何故だ！答えろDr.Ω！」
怒りに顔を染め上げ、返り血に染め上げられた迷彩服。

肩や眼からは今だに出血が止まらない。

人として、生きてはいないはずの彼。

そんな状態で今だ光を無くさない紅の炎を瞳に宿し、白く鋭利な二本の角が美しく輝く。

「うつくしく、理想論だ、甘い、甘いな、狗威 刃」

「貴様に！貴様に何が分かる！俺は親を兄弟を殺され、祖国を分断されたんだぞ！」

赤く揺らめく炎に照らされ、白と黒が睨み合う。

「だから甘い、貴様はもう人では無い。その角、その瞳、あと一歩、あと一歩だ」

「黙れ！貴様もこれまでだΩ！」

狗威はナイフを引き抜き、大きく振り上げる。
その時。

「なに！？」

突如、眼を覆わんばかりの光がΩの胸から溢れ出す。

「あはははは！まだだ、まだなのだよ刃！君は完成する。いや、完成させよう。だから行くぞ、次へ、次の舞台へ！」

その叫びと共に、ドームは白い光に包まれ、2人を包む様に収縮して行く。

そこに、何の変化もない。

ただ、あの二人がいた場所に鉄の棒が残るのみ。

始まり

始まり

「それじゃあお母ちゃん、行って来るネェ」

「気お付けるんだよアヤ。成人の儀式が終わったら、真っ直ぐ帰って来るんだよ」

「分かってるって♪ほんじゃ行って来まうす♪」

「本当に気お付けんだよ」

赤毛の女性が、元気に右腕を振り家から走り出す。

後ろから、年老いた彼女の母親が心配そうに家の扉で見送る。

上半身を捻り、笑顔で母にピースを送る彼女だが。

彼女の進行上に台車を引くおじさんが現れ、あわやぶつかろうとしたその時。

「おっと！ゴメンねえ！」

軽々とその場で跳び上がり、横幅2m近く有る台車を飛び越えた。

「アヤちゃん今日も元気だね、前向いて走んなよ」

「あゝい、おいちゃんも仕事頑張ってねえ！」

そう言い残すと、何事も無かったかのように走り出す。

その後も数件、同じ様な光景が繰り返えされていった。

「すいません、ゴンさん」

「いやいや、元気でいいじゃないですか奥さん」

台車を引くゴンに、アヤの母親が歩み寄り軽く頭を下げる。

「今日は、成人の儀式で」

「はい。アヤも今日で18、早い物です」

「そうですかい。いやあ本当、他所様の子は成長が早いんですね。こんな小さなアヤちゃんがねえ」

ゴンが渋い顔で両手で50cm程を表し、隣でアヤの母親が笑う。

空は青く澄み切り、心地よい風が吹く中。

街に活気が溢れ出す。

石畳の通路を走るアヤに、店を開け始めた人達が挨拶を送る。

彼女は皆に笑顔で挨拶を返し、沢山の店が並ぶ商店街を抜けて行く。この街の名は、商業と運通の都市ザートス。

広大な大地を誇るジーク国の、一つの都市で有る。

大きさは大凡70?、人口5万人程。

街を囲む壁も高くそびえているが、長い年月戦争も起こらず、運通の巨大化で設けられた東西南北に開く四つの巨大な門は、この十数年閉められぬまま。

そんな巨大な門の一つ、西へ繋がる門の乗り合い馬車の発着場にアヤは滑り込んだ。

「ちょっとアヤ。その靴底を削る様な止まり方、どうにかならない。早馬じゃないんだから」

小さな受付小屋から、顔を出した眼鏡の女性が、呆れ顔で溜め息をつく。

「お早うメグ姉!でも私、石畳だとこれ以外止まれないんだよねえ。はは」

少し汗をかいたアヤの顔も爽やかに、ほのかに赤い頬を人差し指でかきながら笑う。

「まったく、到着前に減速すればいいじゃない。それで、今日は何の様」

「おお、流石はメグ姉、頭いい。あっ今日は西の遺跡に行きたいの、私の成人儀式」

イエエイ!みたいな感じで突き出すピース。

微妙に顔に近いので、メグが左手甲で軽く打ち捨て、小屋内に引込む。

「チェットメグ姉冷たくない!後輩の成人儀式だよ!何か無いのか!」

「はいはい、そうね。あんたが成人ねえ、はあゝ何か年感じるわあ」
なんとも怠そうに小屋の窓口に再度姿を表したメグが、ヌツと八角に整えられた棒を突き出す。

「おわあああ！チェっとメグ姉！私何もして無いのに」

いきなり鼻先に突き付けられた赤黒い棒を、慌てて避ける。

「はあ、何言ってるの。祝いよ、祝いの品。アヤあんた棒術やるだろ、持ってるきな。素材はびわだが鉄心が入ってるからなかなか良いもんだよ、ほら」

そう言うのを避けて少し距離の有るアヤに、槍投げの様に放つ。

「ちゅ！ちゅっと危ない！」

顔面に向け飛んで来たそれを、片足を引き捕まえる。

右手で？んだその棒は、手によく馴染み重さは有るがそれほどでもない。

長さも150cm程で手頃。

何となく前と背後で回転させ、空に打ち上げ？む。

「でみ良いのメグ姉。これ精神注入棒だよね、メグ姉の三種の神器じゃあ」

「良いんだよ、後二つ有るしね。気合棒と鉄拳制裁、それで充分」

西の遺跡

西の遺跡

「それじゃあ有難く。有難うねメグ姉♪」

「まっ御目出度い事だしね。後ほらよ、遺跡までのチケット。今日は金はいいよ奢りだから」

「おお！メグ姉有難う！メグ姉は神様だよ！」

小屋から突き出されたメグの腕ごとアヤは胸に抱え込み、眼をキラキラさせながら礼を言う。

メグは恥ずかしいのか乱暴に腕を抜き、ソッポを向くと乱暴に叫ぶ。

「とっとと行きな！馬車は待っちゃくれ無いよ！」

「うん♪行つて来るねメグ姉」

「さっさと行け！」

左手にチケット、右手に八角棒を握り元気に駆け出すアヤを、メグは睨む様に見ながらも、口は嬉しそうだった。

その後も、オツチョコチヨイなのか注意力が無いのか。

馬車の乗車口で棒を引っ掛け尻餅を着くなどして、乗り合い馬車の客達に笑われるなどしながらも順調に馬車は進んで行く。

「お嬢ちゃんは、成人の儀式かい？」

メグの前に座る老婆が、優しい笑顔と共に話し掛けてきた。

「はい！やっと18になれたんです。今から楽しみで」

「ほほほ、そうかいそうかい」

「お婆さんは成人の儀式でどんな神託を受けたんですか？」

「私かえ？私はこの子を授かったよ」

そう行つて、老婆がアヤの前に両手を出す。

すると、周りから水の粒が集まり、老婆の手の平に20cm程の人型が現れ、アヤにお辞儀する。

「お婆さんは水の精霊を賜ったんですね。いいなあ、可愛い」

アヤは少し前屈みになり、水の精霊に人差し指で握手を求めた。
水の精霊はその指を小さな両手で挟み、小さく上下させると、老婆の腕を走り右肩に腰掛ける。

「彼方にも、良い神託が下りますよ。ウーは人見知りが激しい子だけど、彼方の指を取っとは。滅多に無い事なの」

そう言うと、老婆は優しく右肩のウーを見て、頭を撫でる。

その後老婆から果物を一つ貰ったアヤは、成人の儀式についていろいろ聞いてみた。

この世界では、女は18で神の神託を受け、精霊や魔獣。稀に魔女としての素質を見出す者が現れる。

精霊や魔獣は、神託を受けた者の良きパートナーとして一生涯を共にする。

男も15で成人の儀式を受けるが、男は皆魔術師や錬金術の力を得る。

そして、その神託を受ける聖域は古代より受け継がれ、長寿者エルフが管理する遺跡のみで行われる。

幸いな事に、ザートスから遺跡が有るガンジは、馬車で三時間程。

遺跡は数が限られており、このジーク国には四カ所。

成人の儀式の為に遠い街から渡って来る者も多い。

老婆との話も途絶え、流れ行く風景を見ていたアヤも、周りの客と同じく首が揺れる。

魔物や危険な動物も今だ数多く存在するこの国だが、ギルドが責任を持って送りだす冒険者2人が居る事もあり。

皆、馬車の揺れに促され、夢へと落ちて行く。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃん！」

「：ふあい、何れすか？」

「お嬢ちゃん遺跡さ行くんだべ、着いたよ」

「え！嘘！」

完璧に寝入っていたアヤを、もぎりも兼ねて居る冒険者の一人が起

こす。

アヤは飛び起き左右を見て、馬車を飛び出した。

「おじさん有難うね！」

「…おじさんはねえべ…」

元気に飛び出したアヤは、踏み出した一步目から走っていた。

後ろ手に降らてるその手を見ながら、その冒険者にはがい溜め息を漏らした。

ガンジの村は遺跡の加護を受け、遺跡を中心に10?程は敵意有る魔獣や動物は入って来れない。

だが、森や川、空気に淀みが生じるとその結界は弱まり。

最悪神託すらも受けれ無くなってしまう。

そのせいか、この村に産業や錬金術の工房も無く、静かで安らかな空気が染み渡っている。

この村では主に遺跡を守るエルフ達の教会や、学校、孤児院などが作られて居る。

綺麗に清掃され、水魔法で洗われた石畳は常に綺麗なまま。

道を歩く人々も、青いローブを着たエルフの聖職者や、黒いローブを着た学者達ばかり。

まさに村自体が聖なる空域となっていた。

そんななかを、アヤは笑顔のまま走り抜ける。

目指すは眼前にそびえる白亜の神殿。

そのそばにある教会だ。

司教

西の遺跡

「それじゃあ有難く。有難うねメグ姉♪」

「まっ御目出度い事だしね。後ほらよ、遺跡までのチケット。今日は金はイイよ奢りだから」

「おお！メグ姉有難う！メグ姉は神様だよ！」

小屋から突き出されたメグの腕ごとアヤは胸に抱え込み、眼をキラキラさせながら礼を言う。

メグは恥ずかしいのか乱暴に腕を抜き、ソッポを向くと乱暴に叫ぶ。

「とっとと行きな！馬車は待っちゃくれ無いよ！」

「うん♪行つて来るねメグ姉」

「さっさと行け！」

左手にチケット、右手に八角棒を握り元気に駆け出すアヤを、メグは睨む様に見ながらも、口は嬉しそうだった。

その後も、オツチョコチヨイなのか注意力が無いのか。

馬車の乗車口で棒を引っ掛け尻餅を着くなどして、乗り合い馬車の客達に笑われるなどしながらも順調に馬車は進んで行く。

「お嬢ちゃんは、成人の儀式かい？」

メグの前に座る老婆が、優しい笑顔と共に話し掛けてきた。

「はい！やっと18になれたんです。今から楽しみで」

「ほほほ、そうかいそうかい」

「お婆さんは成人の儀式でどんな神託を受けたんですか？」

「私かえ？私はこの子を授かったよ」

そう行つて、老婆がアヤの前に両手を出す。

すると、周りから水の粒が集まり、老婆の手の平に20cm程の人型が現れ、アヤにお辞儀する。

「お婆さんは水の精霊を賜ったんですね。イイなあ、可愛い」

アヤは少し前屈みになり、水の精霊に人差し指で握手を求めた。
水の精霊はその指を小さな両手で挟み、小さく上下させると、老婆の腕を走り右肩に腰掛ける。

「彼方にも、良い神託が下りますよ。ウーは人見知りが激しい子だけど、彼方の指を取っとは。滅多に無い事なの」

そう言うと、老婆は優しく右肩のウーを見て、頭を撫でる。

その後老婆から果物を一つ貰ったアヤは、成人の儀式についていろいろ聞いてみた。

この世界では、女は18で神の神託を受け、精霊や魔獣。稀に魔女としての素質を見出す者が現れる。

精霊や魔獣は、神託を受けた者の良きパートナーとして一生涯を共にする。

男も15で成人の儀式を受けるが、男は皆魔術師や錬金術の力を得る。

そして、その神託を受ける聖域は古代より受け継がれ、長寿者エルフが管理する遺跡のみで行われる。

幸いな事に、ザートスから遺跡が有るガンジは、馬車で三時間程。

遺跡は数が限られており、このジーク国には四カ所。

成人の儀式の為に遠い街から渡って来る者も多い。

老婆との話も途絶え、流れ行く風景を見ていたアヤも、周りの客と同じく首が揺れる。

魔物や危険な動物も今だ数多く存在するこの国だが、ギルドが責任を持って送りだす冒険者2人が居る事もあり。

皆、馬車の揺れに促され、夢へと落ちて行く。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃん！」

「：ふあい、何れすか？」

「お嬢ちゃん遺跡さ行くんだべ、着いたよ」

「え！嘘！」

完璧に寝入っていたアヤを、もぎりも兼ねて居る冒険者の一人が起

こす。

アヤは飛び起き左右を見て、馬車を飛び出した。

「おじさん有難うね！」

「…おじさんはねえべ…」

元気に飛び出したアヤは、踏み出した一步目から走っていた。

後ろ手に降らてるその手を見ながら、その冒険者にはがい溜め息を漏らした。

ガンジの村は遺跡の加護を受け、遺跡を中心に10?程は敵意有る魔獣や動物は入って来れない。

だが、森や川、空気に淀みが生じるとその結界は弱まり。

最悪神託すらも受けれ無くなってしまう。

そのせいか、この村に産業や錬金術の工房も無く、静かで安らかな空気が染み渡っている。

この村では主に遺跡を守るエルフ達の教会や、学校、孤児院などが作られて居る。

綺麗に清掃され、水魔法で洗われた石畳は常に綺麗なまま。

道を歩く人々も、青いローブを着たエルフの聖職者や、黒いローブを着た学者達ばかり。

まさに村自体が聖なる空域となっていた。

そんななかを、アヤは笑顔のまま走り抜ける。

目指すは眼前にそびえる白亜の神殿。

そのそばにある教会だ。

神託

神託

階段を降り、重厚な鉄扉が音も無く左右に開く。

そして、その部屋は有った。

光の無い場所で、不思議といろんな光の粒が灯っている。

暗闇に眼が慣れずキョロキョロするアヤの後ろで、シスターがなにやら壁際のレバーを下ろした。

一瞬の点滅後、白い光が天井から降り注ぎ、暗闇で見えなかった室内の様子が、露わとなる。

それ程広くは無い部屋、壁中にガラスの板が張られ、その後ろでチカチカ光る粒。

部屋の中央に大きな円状の踊り場が、一段高くおかれている。

入り口の左脇で、司教とシスターがなにやら机の様な物を前に作業していた。

「アヤ。こちらに」

シスターがアヤを呼ぶ。

彼女は呼ばれるまま近付くと、机の上になにやら人の手形に掘られたガラスが、白く輝いている。

「さあアヤ。この手形に指を合わせ、聞き取るのです。神の声、彼方を呼ぶ友の声を」

「はい！シスター」

一度、胸の前で強く両手で握った八角棒をもう一度握り直し、ゆっくりと右手を開き。

緊張に少し震える手を、ゆっくり手形に合わせる。

すると、白く輝いていたガラスが一際眩しく光。

「え！？」

アヤの心臓が一段高く脈打つ。

その脈動は大きく、たかく。？

その波は徐々に小さく早く、早く。波が脈動に変わり、激しく鳴り叫んだその瞬間、手形から電流がアヤに繋がる。

その瞬間アヤの脳裏に数多の映像が流れ込み、そして。

「!? アヤ! どうしたの!」

「おいアヤ! 目を覚ませ!」

徐々に闇に沈み、地面に崩れたアヤの視界に慌てるシスターと司教の姿。

そして、首を横たえ最後に見たのは、稲妻が瞬き姿を表す黒髪の青年。

『彼ヲ導ケ』

「アヤ! アヤ!」

「……兄さん」

倒れたアヤを抱え上げ、懸命に呼び掛ける司教の隣で、呆然と司教の肩を揺するシスター。

「何だマヤ! 今はアヤが!」

「いや、アレ」

余りにも呆然とする妹マヤが、ゆっくりと指差す方向。

その方向は精霊や魔獣が呼び出される、召喚の座。

何かデカイ魔獣でも出たか。

司教はイライラしながらその方向を見ると。

「人…だと!?!」

召喚の座には、息も絶え絶えに立つ人の姿。

一歩前に進もうとしたその瞬間。

「…Ω…」

召喚の座から滑り落ちるかの様に彼は転がり落ち、そのまま動かなくなった。

「……とりあえず、運ぶぞマヤ」

「それしか無いわね」

私は夢を見てた。

それは楽しい夢。

黒い髪に黒い瞳の男の子が2人、楽しそうに遊んでいた。

年が上の男の子が、下の男の子のご飯を横取りして泣かせたり。

一つの食べ物を、2人で仲良く分けていたり。

その2人は本当に中が良く、家の中でも外で友達と遊ぶ時も一緒に笑い、悲しみに、そして共に大きくなった。

でも、その後。

大きくなった男の子が、瓦礫の山を走っている。

必死に、両目からは大漁の涙を流しながら。

そんな彼を、大きな影が覆った。

驚き見上げた空には、見た事も無い大きな鳥が何かを落としながら飛んで行く。

彼は空に叫んだ。

止めてくれ！これ以上奪わないでくれ！

でも、その声は届かず。

空から落ちた何かは、大きな火柱と物凄い風を起こし。

彼も木の葉の様に舞い上がり、地面に叩きつけられた。

そこから先は、断片的。

燃え盛る四角い石の家。

泣き叫ぶ子供。

そして、

誰かを胸に抱き、泣き叫び、憎しみの炎に心を焼かれた彼の記憶。

ベッドと牢屋

ベッドと牢屋

「はっ！…ここは」

どうやら寝てたみたいだけど。

私は寝かされていたベッドから立ち上がり、部屋を見渡す。普通の部屋みたいだし。

何気なく窓から外を見ると、大勢の子供達が走り周り。

何人かのシスター達が、子供の手を取り笑いあっている。

「ああ、ここ孤児院だ。でも何で私が？」

窓辺で考え込んでいると、部屋の扉が開き。

「あら、もういいようね。心配したのよ、行き成り倒れちゃって」水桶を持ったシスターマヤが、心配げにアヤの顔を覗き込む。

「そうだよシスター！私神託を受けて、それから…」

「まあまあ、取り敢えず座りましょ」

慌てて詰め寄るアヤを宥め、ベッドに座る様促す。

シスターは、水桶を近くの台に起きアヤの隣に腰掛ける。

「シスター、私の儀式は成功したんですよね？」

自分の記憶では、何者かが稲妻と共に現れた事は覚えられている。

シスターはジッと見て来るアヤの視線を受け止め、そっと手を取る。

「いいアヤ。彼方の儀式は成功したわ。でもね」

シスターがおもむろに目を逸らす。

「シスター。私神託を受けたんです、彼を導けと」

アヤはシスターの手を強く握り、揺らぎ無い眼差しを送る。

その瞳を、シスターは数秒見詰めると。

「いいわ。着いて来て。彼方の新たな友に会いに行きましょう」

その頃、教会の地下。

神殿と繋がれた地下道に、司教の姿が。

彼の視線の先には、鉄格子と岩に囲まれた牢屋内。

藁の山に寝かされた男が一人、横たわっていた。

牢屋の脇、通路に置かれた机の上には、そこで眠る彼の装備が置かれている。

「この見た事も無い武器、それにあの右腕」

司教は知性的な眼を鋭く睨み、横たわる男の右腕を見る。

皮膚は赤黒く、ドラゴンの鱗の様に硬く、突き出された爪は。

その爪を見た後、司教は自分のローブを摘み上げる。

そこには、横に鋭く裂かれた切り口が見える。

「ミスリル製のローブをやすやすと引き裂くとは」

そう苦々しく呟くと、牢屋の男が身じろぎ、ゆっくりと体を起こす。

司教は右手の指にはめた、大きな指輪を一度撫で。

「やあ君、起きた様だが言葉は分かるかい？」

体を起こした男が、左手で頭を抑えられ数度振ると。

司教の方へ振り向く。

その時一瞬左目が燃えている様に見えたが、気のせいだろ。

「言葉が分かるなら返事が欲しいんだが？」

牢屋の男は、困惑顔でジッと司教を見つめるばかり。

やはり言葉が、…そうだ。

司教は一度手を叩くと、ローブから一つの腕輪を取り出した。

牢屋の男はいったい何がしたいのかと困惑顔。

そんな彼を置き去りに、司教は身振り手振りで説明する。

「これを、腕に、こうして、はめるんだ」

上の赤い宝石をスライドさせると、円形の腕輪が三日月形に開いた。

そのギミックに少し興味を惹かれたのか、牢屋の男が立ち上がる。

だが、立ち上がった男は何かに気づいた様にふと立ち止まると、自分の右足を見る。

何度か右足首を回したりして状態を確認すると、今度は完璧に動作がピタリと停止し、おもむろに右手を上げた。

男はその異形の腕をじっくり観察すると、自嘲する様に笑い、左手

で左眼を抑えた。

男の奇妙な行動に、少々困惑した司教だが、それが終わるまで待とうと男を眺める。

左手を離れた男から、一筋の涙が見えたがあえて見なかった事にしよう。

牢屋の男が照れ臭そうに笑うと、ゆっくりと鉄格子から左手を伸ばす。

司教はその手首に腕輪を当て、宝石をスライドさせ固定する。

「どうかな」

『！！分かるぞ、言葉が分かる』

驚きに目を見開いた男に、司教は笑いながら声をかける。

「そんなに驚いて貰うと、こっちも嬉しいよ」

『おっと、顔に出てたか』

「いや違うんだ。これは一種の意思疎通の道具、装着者の心が読める道具なんだ」

その言葉に、一気に警戒したのか後ろに飛び身構える。

『クソ、人畜無害な顔してやる事が汚ねえ野郎だ』

「まあ待って、それはそんなに効力が強く無いから。言いたい事しか伝わらないんだ、嘘だと思うなら一人で考える様に僕の悪口でも考えて反応を見てくれよ」

一瞬強く男から睨まれる。

『……………』

そのまま数分の時間が立ち、そのまま所詮な下げに立って居ると。

『おい、あんた』

「おお、終わったかい。何かな？」

やっと言葉を返してくれた彼は、今だに半信半疑の様子だがしぶしぶ話出した。

『本当に聞こえて無いみたいだな、それか相当の馬鹿でも無い限りこの反応は無いか』

「君が喋りたいと思わない限り、伝わらないからね。何か質問かな」

出会い

出会い

『ココは因みに何処なんだ？西日本かそれとも東日本か？』
牢屋の男の質問に、司教は腕組みし考えるが。

「…済ま無いが何が言いたいのかよく分からないんだが。西日本と東日本とはなんだい？」

今度はその問いに男が困惑する。

「この国の名はジーク、東洋の大陸国だ。君の髪の色からするに西洋の人の様だが？」

『ふっ、それこそ真逆だ。俺の国は東洋に有った島国だし、黒髪は東洋人の髪で、西洋は金髪だ』

「そうかい。確かにこっちでも逆で、東洋人に金髪が多く、西洋人に黒髪が多いが。黒い瞳は始めて見るよ」

『俺だってグリーンの髪に黄金の瞳は始めてだぜ』

少しは打ち解けたのか、微笑で話し合う2人耳に、階段を降りる足音と声が響く。

その音は徐々に近付き。

「あ、司祭様！」

一人が途中走りながらコッチに向かって来る。

「ああなんだ、アヤか」

何か今までと違う声質に少し困惑したが、彼女は司祭の隣まで走る。

「司祭様！私の友達は！」

胸の前で両手を合わせ、司祭に聞くが。

その眼は今までやたらと熱い瞳だったのに、何だか冷めたかの様に冷たい。

何だか居た堪れなくなったその時、しょんぼりと目線が下がる、その時。

アヤの横を豪速球が通過し、なぜか司祭が錐揉みを打って地面に突っ伏す。

後ろからつかつかと歩み寄ったシスターが、地面に伏つた司教の胸ぐらを掴み、隣りの空いている牢屋に放り込む。

「あ、あのシスター。何もそこまで」

「良いのよアヤ。あの変態、成人の儀式後は直ぐあなんだから。それより、彼が彼方の新たな友達よ」

そう言うのと、何時の間にか鉄格子の際まで来ていた男を指差す。

いったい何が起こったのか。

女の子がアイツに走り寄り幾つか話すと押し黙った、そして次の瞬間透明な人型が結構な速度でアイツの右頬に直撃し。

錐揉みを打って飛んでったと思ったら、やたら挑戦的な修道服を着た緑髪の爆乳ギャルが、般若顔でアイツの襟首を掴んで隣に放り込んだ。

すると今度は俺を指差し。

振り向くと、赤毛の少女が俺に微笑み掛けて来た。

「あの、私アヤです！今日から一緒に頑張りますよね！」

私は今、鉄格子の向こうに居る彼に右手を差し出した。

一瞬私の手を見て、何を求めて居るのか分かると。

右手を出そうとして直ぐ、背中隠してしまいました。

彼は司祭様より少しは背が低いけど、黒い髪に黒い瞳。

意思の強そうなキリッとした眉と瞳、肌は赤茶で活発化そうな色。

身体も大きく引き締まり、腕まくりで見える左腕が鍛えられ柔軟な筋肉で覆われているのが見て分かる。

「あの、言葉。分かりますか？」

見せたく無いのか右腕を背後に隠したまま、彼は恥ずかしげに頬を描いていた。

その左手に。

「あれは疎通の腕輪。シスター、意思のペンダント持ってますか」

「ええ持ってるわ、ほら」

隣りで見守っているシスターが、直ぐに自分の首に掛かっているペンダントを外し、貸してくれた。

その赤い親指程の宝石が付いたペンダントを手握り。

「聞こえますか、私アヤです」

その名は

その名は

『聞こえますか、私アヤです』

その時、聞き慣れ無い言葉と、それが意味する事が脳裏に浮かんた。

『俺は狗威 刃だ。刃と読んでくれ、その方が慣れてる』

そう答えてやると、アヤと名乗った少女は隣の爆乳シスターに嬉しそうに何かいつてる。

少女はショートカットで、髪色は赤毛でもかなり紅に近い髪、眼も茶色い縁取りに柘榴の様な赤。

身長は160と少しくらいか、何かスポーツをしているのか綺麗なボディライン、胸はそれなりBくらいか。

スラックスジーンズに淡い色のシャツブラウス、趣味も悪く無い。

『…結構好みだな』

「ふえっ」

ヤバ！漏れたか。

その変化は劇的だった、シスターと共に喜んでいたアヤが、急に真っ赤になりはにかみ下を向く。

シスターはその変化に、ニタァーとした笑みを俺にして来る。

これは、面倒だ。

昔からこう言った女はどうも苦手だ、特に人の顔色が赤や青に切り替わる度に見せる、策略家のその笑み。

取り敢えずこのままでは、埒が明か無いので。

『す、すまない。つい口が滑った。ところで、外に出たいのだが』

「あ、いいえそんな。そうですね、シスターに聞いてみます」

今だ赤い顔で、視線が合うとそらされてしまう。

その上気した顔のまま、彼女はシスターに話をしてくれてる様だ。

数分彼女達は話をする、シスターは隣へ消えると何か引きずる音。

それは完璧に気絶し、白目むくあの男。
乱暴に転がすと上半身を持ち上げ。

「ぐあー！」

このシスター、気絶してるこいつをさらなる痛みで覚醒させやがった。

若干引き笑いの俺と、両手で口を押さえ驚いてるアヤを置き去りに、
そいつ等は何か喋り合い。

少し待たされると。

「そ、それじゃあヤイバさん。上で待ってます♪」

そう言い残し、暴力爆乳シスターと共に来た道に戻って行った。

「いやすまない、お恥ずかしいところを」

男を上等そうなローブに付いた埃を叩き落とし、立ち上がった。
腫れた右頬が痛々しい。

俺の視線に気付いたのか、軽く笑い。

「ああ、気にし無いで良いよ」

そう言うのとやたらと豪華で精密な細工を施された指輪が目立つ右手
を、腫れた頬に当てる。

俺のしている前でボオツと指輪が光ると、放された手の下。

赤く腫れていた頬が一瞬で引いている。

その理解が及ばない光景に、俺を残したまま話が進む。

「自己紹介がまだだったね、私はこの教会と遺跡の管理をしている
エスクルトウラ・ゴヤ・オブラ司教。分かりにくければエスクで結
構だ」

司教と聞いて少し驚いたが、高い地位にしてはフランクなヤツだ。

『有難うエスク、俺は刃だ。早速で済ま無いが俺は出れるのか？』

「よろしくヤイバ。ああ出れるよ、そしてチョットついて来てくれ」
そう言うと、エスクは牢屋の扉を開けてくれた。

扉を潜った俺の周りを、なにか囲む様な空気。

この匂いはイオン、電磁空間か。

『エスク、警戒するのは分かるが。こんな一般的な電磁空間じゃあ

俺は止められ無いぞ』

そう言ってやると、エスクは驚いた顔をして今までの貼り付けていた笑みでなく、鋭く知的な鷹の様な眼で睨んでくる。

「何故分かった」

今にも何かし掛けて来そうなエスクを横目に、俺は鉄格子を背に語る。

『牢屋の中で掛けっぱなしだったら、直ぐには気付無かったが。出た瞬間この特有な匂いと空気の変化、俺の装備見たんだろ、俺は改造兵だ。これくらい分かる』

転送機

転送機

さっきまでの会話が嘘のように押し黙る2人。

『そんな警戒しないでくれ。取り敢えずは状況が分から無い以上、下手打つ気は無い』

「それをどう信用しろと」

『頼む』

俺は寄り掛かっていた鉄格子から背を離し、エスクと正対し眼を見て頭を下げる。

少しの間沈黙が互いを包み、気付けば周囲からイオン臭が消えた。頭を上げると、難しい顔のエスクがついて来いと小さく呟き、俺はそれに従った。

周りを見ると、この独房は石造りの、かなり古いやり方で作られているのが分かるが。

こんな中世の地下牢、コッチも資源不足なんだろうか。

石畳を照らす松明の先に、上に上がる階段と、鋼鉄のゲートが眼に入る。

「ここで君に言語を習得して貰う」

ゲートの前で立ち止まったエスクが、そう言う。

ゲートが左右に開き、松明でない蛍光灯の光が溢れ出る。

『なんだ、転送機があるじゃ無いか』

そう言うと、エスクがまた訝しげに俺を見ると。

「何を言ってる。ここは遺跡の中枢、神託の間だ」

神託の間ねえ。

どうにも何か一枚常識の違いがあるようで、何か頭に引っかかる。エスクは操作パネルを操作して、脳波スキャナのデバイスが稼働準備を終了し、白く光る。

「ではヤイバ、召喚の座に立ってくれ」

召喚の座ね、要するにポーターで直に植え付け様って訳だ。

『なあエスク。聞きたいが、毎回こうやってるのか？』

俺はこれの結果が分かる以上、聞かなくてはいけない問題を聞く。

「あまり数は無いが、そうだ。何か言いたい事でも？」

『これの結果、被験者は二・三日寝込むだろ。脳の海馬にダイレクトに叩き込むんだ、いい気はしない。デバイスでダメなのか？』

俺の言っている事に興味を引いたか、思案顔で考え込む。

そんな彼が操る操作パネルまで近づき、のぞき込む。

今度は刃が驚きの声を上げた。

『オイオイ、こりゃあオリジナルじゃねえか、よくこんなもん使えたもんだ』

刃の記憶では、この操作パネルには数台のパソコンを接続し、後方のスーパーコンピュータで演算解析後起動する物だった。

だが目の前には、何処の言葉ともつかない文字が宙に浮かび上がり、球体を回転させ操作するオリジナルのまま。

分かるのは手形が掘られたデバイスのみ。

「そのデバイスと言うのは？」

不意に思考の渦から帰って来たエスクが、刃に話しかける。

『ああ、コレだ。ポーターからだと言った情報を一気に叩き込んで来るけど、デバイスからなら被験者に合わせて送り込んでくれる。普通はデバイスを使うもんだ。副作用も無いし』

俺は手形のデバイスを指差し、話すと、エスクはまた考え今度はやり方を聞いて来た。

俺も転送機は専門外だが、使用した事は有るのでそれなりに説明すると、エスクは少し球体を操り結構アツサリとセットアップが終了した。

そして、ゆっくりと手形に自分左手を合わせる。

デバイスを一段押し込むと、脳内に言語情報が流れ込む。

だが、その中に。

急に目の前が暗黒に包まれ、俺の姿が薄く発光する。
そして、そこには。

淡い光の粒子が身体を形成する者が、俺以外に一人。
聞き慣れた一本調子の拍手。

見慣れて胸糞の悪い白衣に、気色の悪いその面。

「Ω」

「いやいや、元氣そうで何より、うん、嬉しいよ。君を待ってたよ
狗威」

「てめえ、何処にいやがる！バーチャルなんか繋げやがって、覗き
見趣味のストーカーが！」

「ほほ、いや、参ったね。私も今、この国に居るよ。ここは良いね、
君も氣に入る、良いところさ」

「ふざけんな！どこに飛ばした！」

その時まさにその問いを待っていたとばかりに、芝居がかった会釈
と共に、宣言した。

「ここは異世界、あの箱舟が旅した一つの世界、科学でなく魔法と
錬金術がまかり通る世界」

何だと。

俺はその言葉に驚愕する。

このマッドはイカレてはいるが、嘘はつか無いし、自分の見た物し
か信用し無い、まさに科学実験の様なヤツだ。

残るのは結果のみ。

「そうだ、そうだ、狗威、君を、君を完成させ無いと。安心しろ、
宿題を、宿題を出そう。それを辿れば私が居る、わたしに会いたい
んだろ」

「うるせえ！とつとと姿表しやがれ！今度こそ息の根を！」

「ははは、嬉しいよ、そんなに思ってくれて。でもね、まだだ、今
の君じゃつまらない、でもね、嬉しいから少しサービスだ。ではま
た会おう狗威刃」

「待ちやがれ！おい！」

「宿題は君を招いた彼女だ、頑張る事だよ、待っているよ」

そう言い残すと、Ωの身体は砕け散るように消えて行き、俺も現実の世界へ。

秘密の会話

秘密の会話

「ぬうっ！クソΩの野郎！」

「おお、言葉を覚えたんだな刃」

数秒黙り込み、眼から光を無くした刃が、突然怒鳴り声を上げる。

「うぬ、すまんいきなり。エスクのお陰で何とかだったが、少し聞きたい」

「なんだね。これでも聖職者だ、話してみたまえ」

言葉が通じたのが嬉しいのか、エスクの瞳に好奇心が交じる。

「ここの国の人達は、魔法が使えるのか」

胡散臭げに語る刃に、彼は数度目蓋をパチクリさせ。

「何を今更、君は独房で見破ったじゃ無いか。皆では無いが魔法使いは多いよ」

エスクの顔は、なにを今更当たり前なことをつと言いた顔。

「なら本当に、異世界なのか？」

腕を組み唸る刃。

それを何だか楽しそうに、それこそ新たなオモチャを見つけた子供の様に知的興奮が鳴り止まないエスクは。

「異世界、それは聞き慣れないものだ。取り敢えず上に上がろう、2人も待ってる」

牢屋から張り詰めていた警戒心より、今は好奇心が上回る彼は一人考える刃の右手を掴み外に出る。

その行動に刃も面食いながらも、引かれるまま歩くが。

不意に、引かれる自分の腕に視線がいき。

「：！？ちよつと待て」

ビタリと停止した刃、それを引いていたエスクが急な停止に転びそうになる。

「何なんだ、早く上に…」

振り払い開放された刃の右腕。

驚きと共に自分の腕を見つめる刃に、エスクもその変化に気付いた。その腕は、ついさっきまで凶悪なドラゴンの様な筈だったのだ。

「元に戻って。…いや違う」

一瞬惚けた様に人間の右腕を見ていた刃が、不意に睨む様に自分の右腕を見る。

すると、変化は起こった。

陽炎が立ち昇り、右腕を覆いその姿を変えて行く、人の腕が幻の様に霞むと。

そこには血を固めた様に赤黒く輝く鱗、鋼鉄をも引き裂く凶悪な爪。その大きさも、先程の人間の腕より二倍は太い。

その腕の調子を調べ、もう一度眼前で睨む、するとまた陽炎に包まれ人の腕が現れた。

「……便利だな」

「本人がそれで良いなら、僕はなんにも言わ無いよ」

淡々と顎に左手を当て、自分の腕に感想を述べる刃に、エスクはため息混じりで答える。

男2人がこうして居る間、教会の庭ではアヤとシスターマヤがお茶を楽しんでいた。

爽やかな青空の元、パラソルと木製の頑丈そうな机、椅子は4つ。

教会側の2つに腰掛け、雄大な草原を見ながら、楽しそうに語り合っていた。

「それで、司祭様はいつも儀式後はあなんですか？」

アヤは地下で会った司祭エスクの態度が、今までとまるで違う事に疑問と、何かして仕舞ったかという懸念が頭から離れない。

「そうなのよ、毎回困るのよ。兄が幼年学校で勉強を教えてるの知ってるでしょ」

「ええ、私も5歳から3年間習いましたし」

アヤは両手にティーカップを挟み、昔を思い出す。

シスターは、紅茶を一口飲むと大きなため息を漏らして。

「あれ、兄の趣味というか、視察と言うか」

「勉強を教える事が趣味なら、良い事では無いですか」

聖職者が学校や街の人々に、無償で様々な奉祀活動をする事は良くある。

アヤも教会が無償で開いている、幼年学校を受けた人間だ。

シスターはそこでもう一度大きくため息を漏らすと、頭痛がするの
か額を押さえ語り出す。

「そうね、確かに良い事だわ。でもね、本当の兄の狙いは、そこか
ら天使を見つける事なの」

「天使、ですか？天上界の？」

アヤが何の事か考えていると。

「違うのよ、それが。兄の天使は自分好みの幼い女の子を見つける
事なの」

「え？」

事態が飲み込めず、困惑するアヤに隣で、シスターは大袈裟に手を
広げ。

「ウチの兄、5歳から14歳までの女の子が大好きでね。特にお氣
に入りの子でも永くて18歳まで。アヤをを見つけた時なんか、三
日三晩神に感謝を述べていたものよ」

「えっとう、つまり司祭様は」

アヤはやけに冷たい汗が、頬を伝うのを感じる、これ以上聞いたら。
「そうなのよ、ウチの兄。エスクルトウラ・ゴヤ・オブラ司祭は幼
女趣味なの」

その瞬間、今まで向けられた司祭の視線がどんなものだったのか。
それが俗に何という種類の者か理解してしまったアヤは、自分の視
界から色が消え、大きな亀裂が入る音を聞いた。

改めて

改めて

そんな、今まで敬っていた司教の正体を知ってしまったアヤは、今後一切敬う事を辞め。

もし、万が一、間違いが起こった際。

シスターと共に、変態に正義の鉄槌を下す事を硬い握手と共に誓い合った。

そんな、なにか夕暮れ時の土手で漢の友情を感じさせる背を見ながら。

刃とエスクが後方で、眺めていた。

「…お前、主義者だったんだな」

「うむ、主義者か、いいなそれ。だがねヤイバ、私は見て感じて夢の世界に信仰心を燃やしているんだ。別に肉欲は無いよ」

「へいへい、そうかよ」

大真面目な顔して、言ってる事が犯罪者な聖職者に、職業軍人は呆れて物が言えない。

「なあ、俺等どうすんだ？」

「なに、何時もの事さ。行こう」

そう言うのと、エスクは彼女達歩み寄り話しかけ、二人共席へ付いた。

「もう僕の自己紹介は終わったし、僕の前に座っているのがマヤ、僕の妹だ」

席について早々、エスクが刃に紹介を始めた。

そうして紹介されるた、シスターマヤは困惑顔。

「兄さん、言語はどうしたのよ」

「いや、もう終わった。よろしくシスターマヤ」

そう言っただけで俺が手を伸ばすと、驚いた顔で喋ってくる。

「驚いたわ。普通何日か寝込むもんだけど、どうやって」

「それは、後で話すよ」

司会役のエスクが、すかさず合いの手を入れる。

「そう、まあ兄の顔がああって事は面白い事が会ったのね。よろしく、確かヤイバよね。私はマヤでいいわ、信者になるならシスターでいいわよ」

そう言っ、笑顔で握手を交わす。

エスクの兄妹らしく、良く似た顔だが。

知的なシャープさを持つエスクと違い、柔らかに包み込むような女性性の暖かさが滲んで来る。

「そして、君の前に座るのが」

本日二度目となる自己紹介だが、俺のウツカリ発言でもう既に頬が上気しているのアヤ。

俺がΩの話を思い出して、ジッと見つめと。

「はっはう！」

「これから、来る前に言っただけど、彼女が神託を受け君を呼んだパートナーだよ。そんなに睨むもんじゃない」

「そうよ、自分の好みだからって見つめ過ぎよ。まだお互いも知ら無いでしょ」

茹でダコのように真っ赤になり俯いたアヤを助けようと、エスクとマヤの兄妹が間に入る。

「むっ、いや、コレは。つうか睨んで無い！すまないアヤ、狗威刃だ。改めて宜しく頼む」

俺は席から立ち上がり、アヤの隣で握手を求めた。

俯いた視界に入った手を、少々緊張しながら顔を上げたアヤに、つい顔が緩む。

「此方こそよりしくお願いします、ヤイバさん」
？

「ねえ兄さん」

「なんだマヤ」

二人が笑顔で握手している隅で、兄妹二人は長身と爆乳を不自然に折ってヒソヒソ話を始める。

「やっぱ、試練も与えるの？」

「そうだな、それが通例だし」

そこで兄妹は、チラリと反対側の2人を見る。

刃は立ったまま座るアヤを見ながら二、三話をしてたまに微笑を浮かべる。

アヤはたまに上を見ては、視線が会う度下を向きあうあう言ってる。

「ありややるしかないだろ」

「そうね、殺るしかないわ」

「お前が何故怒るか分からんが、僕はやらせるよ」

そう言っているとエスクは立ち上がり、手を叩く。

その音に刃とアヤは振り返り、エスクを見る。

「早速だが、試練を受けて貰うよ。なに簡単な事だよ、丁度村外れの森にオークが出てね、それを間引いて来てくれ」

その言葉にアヤは慌てて跳び上がり。

「えっ！？オークを！正気なの」

「…強いのか？」

腕を組み、状況がわかってい無い刃に。

「オーク1匹はそこまでだけど、何時も群れで行動するし、囲まれると」

「まあ全滅させて来いって話じゃ無いから。そうだね、10匹分の尻尾を持って来て」

そう言っていると、エスクは教会に帰って行き、マヤも後続く。

教会の扉をくぐる寸前、エスクが振り返り。

「ああヤイバ、君の装備一つと袋渡すからついて来て」

そう言い残すと、手を降り教会内に消えて行った。

相棒

相棒

1人アヤを庭に残し、刃はエスクを追って教会内へ消えて行った。残されたアヤは、不安と不思議な胸の高揚感に、頭がこんがらがらうしよう、私ヤイバさんを直視出来ない。

思い返せばアヤの周りに年の近い異性は居なかった、学校も教会が運営するところしか通っていない。

女性ばかりだったのはあの司教の趣味だったに違いない、男性はザートスの学校だったし。

12歳からも、メグ姉やお姉ちゃん達のところで仕事してたからこんなに男性と2人つきり。

「きゃ、違うのコレはヤイバさんが変なこと言うから」

何やら1人で悶え、赤面しながら立ち上がると、手に持った八角棒を縦横無尽に回転させては振り回す。

教会の扉から、急に立ち上がり素早い棒捌きを見せるアヤを、刃は見ていた。

今は回転と捌きだが、その速度は素早くしなやか。

一打一打が良い風切り音を響かせている。

「…オークはそんなに手強いのか」

刃はアヤが心配そうに語っていた事と、アヤの技量を参考に敵を予想する。

だが考えてみても、この世界の常識を知ら無いし、モンスターなど論外。

道中話を聞くしかないな、よし。

「待たせた。準備が出来たので行こう」

扉から歩み出した彼が、アヤに声をかけると。

「へっ、…痛！」

突然響いた声にビクッと身体を膠着させたアヤの額に、返した棒が

ぶつかる。

痛みに額を押さえて座りこむと、刃が歩み寄り。

「おいおい、大丈夫か。木製にしては派手な音がしたが」

予想以上に中身の詰まった重い音に、心配になり額を見てやると。

「ちょっと見せて見ろ。大丈夫か？」

刃も膝ま付き、額を押さえたアヤの手を退かす。

ぶつかった場所が赤く、少し腫れてる。

確か渡された袋に。

エスクから渡された袋を開き、水の入ったビンを取り出し額に当てがう。

「さっき井戸から汲んだ水だから、少しは良い筈だ」

そう言って微笑み、頭を軽く叩いて立ち上がる。

「行こう相棒、俺はここを知らないから。よろしく頼む」

そう言うのと、しゃがみ込んで額にビンを当てたまま、ゆっくりと上目遣いに目を合わせたアヤが。

「はい！任せて下さい♪」

そうして2人は歩み始めた。

オークが出ると言われた森はここから1時間程歩いた場所に有る。道中さほど話題も無く、ほとんど会話はアヤが振り、適度にそれを刃が返した。

そして、森に大分近付いた頃。

「そう言えば、ヤイバさんの服。変わっていますよね」

そう言うのとくると一歩先を歩くアヤが反転し、後ろ歩きをしながら刃の迷彩服をしげしげと見る。

「何だか森の藪みたいですよね」

そう言われると、小さく苦笑して。

「ああ、この服はそれこそ森や山の景色に紛れる為の服だしな。変かな」

少し恥ずかしそうに言う。

「いや、あの、変と言うか。見た事が無かったので」

女の子に気を使われるとはな。

「形状は変わら無いけど、パターンんと色なら変わるぞ」

「えっ！？着替えないですか」

驚くアヤを置いて、右の襟を引くと。

「わ！？変わった」

刃の迷彩服がパターン無しのカキ色に変化した。

次に左襟を引くと黒、両方引くと迷彩（自衛隊迷彩）に戻った。

「まあこんなもんだ、科学繊維だから汚れも勝手に落ちていくからかなり便利なんだ」

黒に変わったトコで立ち止まり、驚いているアヤに説明するが、恐らく聞いてない。

何やらうずうずと襟を見ている事から。

「やってみるか？」

「はい！」

そう言って少しは前屈みで襟を出してやると、即答で掴んで来た。

1・2分それで遊ばれ、森の前でアヤの驚きと楽しげな声が響いく。

だが、そんな時不意に刃が何かを感じた。

遭遇

遭遇

刃はエスクに返して貰った大型ナイフを抜き取ると、気配のする方へ投げる。

ナイフはトマホークの様に回転し、森の中へ消え。

「B u h i i i i i i i ! !」

森から耳をつんざく叫び声が響く。

「あれは、オークです」

「見て来る」

突然鳴り響いた叫び声に、アヤが驚きながらも声の主を教える。

それを聞いた刃は、滑る様に駆け出すと。

「ああ！私も行きます！」

走り出した刃の背中を追いかけ、アヤが走り出す。

即座に駆け込んだ藪の中には、頭をかち割る様に眉間までナイフで割られた猪の顔した肥った猿の死体。

大きさは道中聞いてた通り、150cm程で、猪と猿がかけ合わさったような姿。

1番乗りした刃が、すかさず死体からナイフを抜きこびり付いた血と肉を一閃して払う。

少し遅れて入ったアヤに、この死体を見せて良いのか少し悩んだが。

「ヤイバさん凄い。投擲で仕留めるなんて」

あまり見えていて良い気分はしてない様だが、死体や肉片は大丈夫そうだ。

仰向けの死体に蹴りをいれ、背を向けさせると、人參程の大きさで黒い体毛に覆われた尻尾が見えた。

先端を握り付け根から切断する、その切った尻尾を刃は眺めて。

「コレを集めて何になるんだ？」

「ヤイバさん食べた事有りません？オークの尻尾は美味しいですよ、

塩やタレで焼いたり煮込んだり」

「へえ、これが。それはそれは」

じっくり観察した後、肩に下げた袋から同じ大きさ、普通のリュックより少し大きいぐらいの袋を取り出し中に入れる。

「あの私も持ちますよ」

「いや、まだ良いよ。帰りに水と食糧の方を頼む」

「む、私だって少しは戦いの経験有ります。2つ有るなら1つ持ちます」

ムツとした顔で左手を突き出す彼女に、ちょっと困る刃。

袋は2つ、1つは水が2本と大きめのバスケットで作られたサンドイッチ2本、そしてもう片方がオークの尻尾入り。

血管が少ないのかあまり血は流れてないが、数が増えれば血で汚れる。

だからと言って今重い方を渡すのも。

そんな遠慮しまくりな考えをしていると、茂みの先で蠢く影。

「来た様だぞ」

「え？…うわ本当だ！」

刃が袋を手早く収納し肩に下げると、睨む先から動物の声が響く。アヤも遅れながら、臨戦体制に入った。

今度は複数だな、この調子なら早く終わる。

そう思った瞬間、茂みが揺れ黒い塊が4つ、刃より一歩前に出ていたアヤを襲う。

一瞬守りに入ろうかと思ったが。

前方の四方から飛び出す影に、アヤは鋭く睨み、八角棒の中心を握り前に突き出し、一文字に構えた。

肘を突き出す様に右下を跳ね上げ、その反動で引いた反対で左上を振り下ろす。

そのまま少し傾け左下、右上を叩き落した。

ほぼ同時に飛び出した四匹を、微妙な誤差を読み取り瞬時に叩き落す。

最小の動きで最速の打撃。

落とされた四匹も、打撃に重さが無くそれ程ダメージに繋がらないが、そのうち二匹は脳を揺らされ、行動が遅れた。

その遅れを逃がさず、棒を握り直し背後に回すと、そのまま打ち下ろす。

まともに食らった一匹の頭蓋が割れる音が響く、右から振り下ろしたそれをまた背で回転させ左のオークに膝を向け振り下ろす。

瞬く間に二匹のオークを、行動不能にした。

響いた声

響いた声

残った二匹は慎重に距離を取り、アヤを睥む。

だが、動かないオークに反しアヤは鋭く飛び出す。

一番近くにいたオークの首目掛けて飛び出し、踏み込んだ足音も大きく八角棒の先端がオークの喉を突き首骨を砕く。

引き抜くと同時に鋭い回し蹴りが右頬から炸裂し、首が真後ろを向いた。

だが、その瞬間もう一匹が振り切ったアヤに向け飛び掛った。

防御しようと構えるが、振り切った体制から無理に身体を捻らせ防御が遅れる。

紙一重の隙に飛び込んだオークの黄色く汚れた爪が襲い掛かる。

爪がアヤの衣服に触れる寸前、重量感の有る風が唸りを上げ横切る。すると、迫り来ていたオークは消え、右側で木に何かが突き刺さる音が響く。

「結構な腕だが。最後で脇が甘い」

後ろで観戦していた刃が、アヤの肩を叩き労う。

彼はそのまま胴を貫通し、脇の木に縫い付けられたオークの首筋を踏み付けナイフを抜く。

その際微妙に動いたので、そのまま力を込め首をへし折った。

「ふー、結構頑張ったのにな。まだまだかあ」

「いや、かなり良い腕だと思うぞ、無駄無く理想的な動きだ。欠点は早さを重視し過ぎての力不足、これは後々ついて来るさ」

そう言いながら彼はオークの尻尾を回収して行く。

まるで山菜を取るかの様な気軽さ。

「はい、そうなんです。どうしても決定打が打てなくて」
自分でも理解していた問題点をつかれ、少しは落ち込む。

そんな彼女の脇に回収が終わった刃が歩み寄り。

「なにへコタレてんだよ、何なら俺が稽古つけてやるよ」

「本当ですか！やったあ♪」

そう言うと、跳び上がって喜び刃の手を取る。

「これからお願いしますね、ヤイバさん♪」

「お、おう」

あまりに無邪気な笑顔を向けられ、つい顔を背けてしまう。

「さあ、そうと決まったら。とっとと終わらせましょう！」

ふう、やれやて。

到底オーク討伐に來たとは思えない、呑気な雰囲気。

突如鳴り響いた人の叫び声。

「今の声！」

「恐らく人だ、急ぐぞ」

その声は森の中、ここからさらに分け入った先から聞こえる。

2人が走る先、途中複数の怒鳴り声も聞こえて來た。

「何だってんだ！こいつが居るなんて聞いて無いぞ！」

「黙って攻撃しろ！死にてえのか！」

「どうでも良いから早く始末しなさいよ！」

そこは森の中心部、大きな大木の下、あの世へ通ずるかの様に口を開けた洞窟。

今その中からは、数十は居るオークと、普通のオークの倍は有る巨大なオークが、薄汚れたバトルアックスを片手に人間達を睨んでいた。

オークに包围された人間は三人。

革の鎧を着た男が二人と、黒いローブを着た女が一人。

男達二人が、何とかオーク達の攻撃から身を守っているが、ジリジリと数で押されて逃げ場を無くして行く。

背後に朽ちて倒壊した巨大な木が道を塞ぎ、逃げるにはどちらか一方のオークを切り開か無くては行けない。

その時だ。

前方で睨み合っていたオークが、男達に飛び掛かる。

二人は懸命に手に持った剣を振り回し、追いつがるオークを斬り捨ててるが。

ついにその数に吞まれ、引きずり倒される。

そして後方で泣きじゃくる女に、オークが飛び掛った。

三匹の醜い化け物が、視界を埋め、喉がひりつく。

覚悟を決めきつく目を閉じた。

恐怖で身が強張り、何も考えられ無い。

来るべき衝撃と痛みに、心が降るえる。

だが、もうそこまで来ていた筈の獣の気配が無い。

「もう大丈夫だ！気をしっかりもて！アヤここを頼む！」

「任せて」

閉じた目を見開くと、あの獣共は居らず、目の前には逞しい男性の背中が。

マザーオーク

マザーオーク

到着した時は、前方で剣を振るう男達が倒されたその瞬間だんだ。

「クソ！間に合え！」

彼等は背後の何かを守っていた。

加速を付け、前方の太い枝に飛び付き一回転。

加速と遠心力で速度をつけ、大凡の地点に飛ぶ。

そこには黒いローブを着た女が泣き崩れ、今まさにオークに襲われそうとする、その瞬間だった。

そのまま一番手前のオークを踏み付け、真横の二匹に横蹴りを叩き込む。

踏み付けたオークは、軸足で捻った際頸椎が碎け激痛に悶える。

横の直蹴りを食らった二匹目は首をへし折ったが、反対側の三匹目は吹き飛んだだけだろう。

泣いている女に声を掛ける、オークの間を跳びながらこちらに向かうアヤに後を任せ。

俺は前に駆け出し今だ抵抗する男達を襲うオークに、草を刈り取る様な左右の下段蹴りで助け出す。

「大丈夫か！」

「はあはあ、すつ済まねえ助かったぜ」

「本当によろ、死ぬところだった」

男達は息も絶え絶えに立ち上がり、剣を構え飛び掛かるオークを斬って行く。

俺もナイフを握り、オークの首や腹、両目を斬り裂く。

「スゲー、兄さんなに者だい」

「飛び掛かるヤツ全部仕留めてりゃあ」

「口より手を動かせ！」

左右で喋る二人を置いて、真っ向から突っ込んで着たオークを、一

刀の元頭を斬り裂いた。

すると、奥で控えていた巨大なオークが動き出す。

「ヤバイ、マザーが動き出した」

「アレがボスか！」

「あいつがこいつ等の母親だあ！」

そうか。

見れば結構な数が戦闘不能になっている、これなら。

「すまんがヤツを斬る、任せたぞ」

「おい兄さん！」

驚いた二人を尻目に、進路の邪魔になるオークを斬り裂き、マザーの前に躍り出た。

「B u o o o o o o w ! !」

「全く、デカくても豚だな」

出て来た俺に雄叫びを浴びせ、大きな斧を降りおろして来る。

除けられない事は無いが、この質量は脅威だ。

避けて懷に踏み込むが、力にものを言わせた斧の振り回しが、あと一步のところで邪魔をする。

「全く、このデカブツが」

俺は後ろに引きながら、その巨大な斬撃を避ける。

右へ左へ繰り出されるその攻撃は、徐々にコンパクトに収まって行く。

モンスターの分際で、学習しやがったな。

心の中で悪態をつきながら、どうにか踏み込めないか身定めるが。

マザーはその巨大な斧を、手旗を降るかのように軽々扱う。

踏み込もうと挑み、避けては後ろに跳ぶ。

だが、とうとう俺の背後に大木が壁となり立ちはだかる。

それを見たマザーが、薄汚ない面に勝利を確信し大きく降った。

「待ってました」

大きく降られたそれは、俺を追い詰める事ばかり考え、重心が前にかかり思いの外出過ぎた斧が大木に食い込む。

その寸前で跳んだ俺は斧を駆けの登り、目玉に刃を上に向け握ったナイフをぶっ刺す。

臭い口臭と、汚い唾液がかかる前に、刺したナイフのグリップを支点にマザーの額に背中を預け、後頭部を滑りながら頭部を切り裂く。抜けたナイフを右手に、左手はマザーの頭髪を握り、身体を反転させながら右首筋にナイフを突き立て捻る。

ナイフを引き抜き跳び去ると、マザーオークは右目と右首筋から大量の鮮血を撒き散らし、膝から大地に崩れ落ちた。

衝撃で地面を揺らしながら倒れ、生命を手放したマザーオークを背後に、ナイフの血払いを済ませ鞘に収める。

「ヤイバさん！」

丁度その頃になると、あらかたオークの撃退を終えたアヤが駆け寄って来た。

小イベント？

小イベント？

「ヤイバさん！大丈夫でしたか！無茶ですよ！マザーオークに一人で挑むなんて」

よほど急いでいたのか、すべりこむ様に駆け寄って来たアヤはまくし立てるように言ってくる。

「だが、無事に完遂したが？」

彼女も分かっている筈が無い。

あの革鎧2人とアヤでは致命打にかかる、だが俺が単騎掛けで挑めば、少なくとも時間を稼ぎ注意を引く事は出来たはず。

結果は仕留める事に成功したし、問題無いはず。

「そう言う問題じゃありません！」

そう言うとか微妙に震えながら涙目に。

「いや待て！心配させたなら謝る！」

女の涙とか卑怯だろ。

プイとそっぽを向いたアヤに、何とか機嫌を直してもらおうと四苦八苦していると。

「ん？」

誰か俺の上着を引っ張っててるが？

俺は何ともなしに振り返ると。

突如顔を挟まれ、暖かく、柔らかいモノが俺の唇を塞ぐ。

「なっとなっ！何してるんですか彼方！」

そう叫ぶと、アヤが間に入り込み、唇が開放され、残った暖かみが甘い。

俺はそれが何で有るか理解出来る、だが何故？

「ちよっと邪魔し無いでよね！暗殺よ、つうか盛るよ」

「五月蠅い！行き成り何って事！」

強引に間に入り八角棒を構える、犬の喧嘩ばりに吠え合う2人。

「なによ！そこを退いて、私の黒き騎士様との蜜月は邪魔させない！」

「みっみみ、蜜月うう！ヤイバさん！」

おいおい、俺は関係無いぜ。

その言葉に涙目で刃を見つめるアヤ、その隙に刃の右腕に絡み付き、熱い眼差しを向ける女性。

刃は熱量が感じられる両者の視線に、どっとした疲れと明日への希望が：

「よく考えろ、アヤ。今日召喚され言葉を覚えた俺が、何処でこの人と知り合える？」

「むう、それはそうですけど。ヤイバさんのその余裕には、なんだか納得いきません」

「まあ、私の事はフィーエって言ったじゃありませんか」

おいおい、俺の脇腹にのを書きながらなに言ってるんですか電波さん。だがそんなゆうちな事考えている場合じゃ無かった。

俺の前方で火柱が上がった。

やばい！ナパームだ！

HQ！HQ！応援を！応援を！

刃の額に玉の汗が濁流のように流れ、首と顔が動か無い。

必死に眼だを眼前で燃え盛るイフリート、もといアヤを見たその時。刃の腕に絡み付き、熱病にかかったかのような視線を送るフィーエ目掛けて。

腰の捻りも強烈な刺突が繰り出された。

流石にこれには反応し、腕を掴んだまま、ダンスを踊る様に華麗なターンで避けるフィーエ、刃の右手首とフィーエの左手は繋がれたまま。

腕二本分開いた空間に、空を挟った棒の先端を地面に突き刺し、棒高跳びの要領で容赦無いドロップキックが放つ。

条件反射的に危険を感じた刃は、左肘を上下させ半回転。

フィーエを強制的にターンさせると、左手首を開放させ頭から飛び

込む。

「ふにゃっ!？」

ドロップキックの目標を見失った鉄槌アヤが、腰から地面に激突するギリギリで、刃の両腕が彼女を抱え込む。

「ふうゝ。落ち着けて、なっ」

アヤを抱え、強かに地面の抱擁を背中に受けた刃が、そのまま立ち上がる。

胸中に抱き締められ、真っ赤に俯く彼女を抱いたまま、口惜しい様にハンカチを食いし縛るフィーエに向き直り。

「すまんがフィーエさん、俺は今日この世界に来たばかりでね。誰かと勘違いして無いか？」

王乳茸

王乳茸

一通り落ち着いたのか、フィーエは若干目の下を赤くし。

「何を言われます黒騎士様！先程からあんなにお慕い申しておりますのに、心の声を通じませんの」

いや、無茶言うなよ。

「すまない、何分軍人稼業が永くて俗世に疎い。自己紹介を頼みた
い」

「そうですね。戦いに身を焦がす彼方の心ですものね、わたしの声が届かなくても仕方ありませんわ。私フィーエ、フィエブレ・ウルヘンテ。鍊金薬士ウルヘンテの1人娘ですは騎士様。そのままフィーエと呼んで下さいませ、それと一つ。オイそこの、とつとと離れなさい！」

優雅にローブの端を握りお辞儀したフィーエが、突如睨むと指差し。刃の胸で真っ赤に膠着したアヤに怒鳴り込み、引き剥がそうと掴み掛かるが、刃にかかるくスルーされ、彼は胸中のアヤをゆっくり地面に降ろした。

残った右手が名残惜しそうだが、それよりも。

「まあ待ってくれ、フィーエ。彼女は俺を召喚した相棒なんだ」

今にも再度の突撃勧告を発令し、そうなフィーエに向き直ると。

「…召喚？…成人の儀式ですか？」

フィーエは先程からの会話から、可能性の有る答えを導くが。

「では、騎士様は精霊か魔獣の一種でしょうか？そうは見えませんか」

しげしげと刃を観察する眼に、科学者特有の現実味と可能性を考える光が見えた。

言ってる事は無茶苦茶だが、知性と教養の高さが伺える。

「俺も一般的な人で無い事は認めるが、精霊や魔獣に成った覚えは

ないよ」

何と言う事でしよう。

ああ、私の黒騎士様があんな小娘の使役者だなんて。

あの黒曜石の様な瞳、濡れた鴉の羽根の様に美しい髪色。

鍛えられ、虎や俊敏な肉食獣の様なしなやか筋肉。

肩口から素肌を晒す右腕、黒一色に統一された服から見えるその鉄火の様な肌が、黒と赤のコントラストで美しいですは。

この人を私の物に、いえすでに私の心では月夜に照らされたベッドの上、求めあう私達。

ええ、そうですとも、私の心はもう既に彼方と言う麻葉無しでは生きていけ無い。

何とも妄想爆裂、思考が彼方に跳んでいった悪電波。

一瞬見せた知性の光りから、マッドな薄気味悪い微笑を垂れるフィーエに。

なんか、ヤバイモノに出くわしたかもだな。

何やら呟いたかと思えば、一人でブツブツとなんか喘いでるし。

見た目アヤと同じ年か、もしかすると下の可能性も有る。

俺に向ける誘う様な色香が無ければ、最初の慌てようと見た目から下だと断言出来るが：

フィーエはウエーブのかかったシルバー、愛嬌の有る瞳は暗い緑。

顔付きは少女と言ってよい程幼く、保護欲をかきたてられる。

黒にローブにこれまた黒のブレザーとロングスカート、見た目だけなら知性の黒だが、何処か艶めかしさを感じられる。

恐らくその理由は彼女から発せられる、指向性の妖艶な熟した果実のような視線のせいだ。

電波な言動と、この高級娼婦ばりの艶めかしさが無ければ、真面目な学級委員的なはずだが。

お互い相手に思考を割き、数秒の沈黙後、後ろからおずおずと革鎧の2人が現れ。

「あんのう、すみせんがお嬢様。オークの茸、どうしやす？マザーはこの兄さんが狩ってくれやしたし、これなら巢の王乳茸が手に入りやすぜ」

「そうでしたは！スーニ何をしてるの早く行きなさい！」

現れた2人の内、スーニが前に出てフィーエにそう言うのと、大木の下。

ぽっかり空いた洞窟を指差し、革鎧2人に叫ぶ。

「「はいい！ただいま！」」

そんな2人を見送り。

「なあアヤ、王乳茸とは？」

何やらフィーエを牽制する様に、睨んでいるアヤに話しかける。

「えっ！ああ王乳茸ですか、話では生まれて間も無いオークの為に、マザーが育てた茸です。それ一つで多くの病を直し、食べて三年は病気にならない程凄い茸です」

「それは凄いな、見て見たいんだが」

そう言った瞬間、猫が獲物に飛び付く様な勢いで、刃の右腕の中に滑り込むフィーエ。

「そうでは、私達の熱い夜の為、さあ行きましょ。あれ一つで三日三晩、それこそ四六時中」

「チョット待て！俺にその気は！」

刃の腰に腕を絡ませ、ずいずいと引っぱって行くフィーエ。

「もう辞めてよ！ヤイバさんは私の相棒なの！」

そう言って刃の左手を掴み、引き留めるアヤ。

洞窟内

洞窟内

そんな3人を洞窟前で、松明の用意をする革鎧の2人。

「いいんですかスーニさん、お嬢様。なんかスゲえ変ですけども」

「ええんだ、タンはああなったお嬢様は初めてだろうけども。今までお嬢様が飼っていた動物がどうなったか、知ってるべ」

「ええ、3日前も飼われて三週間のワーキャット（飼育用）の衰弱死体を埋葬しましたし。それが？」

スーニは火の付いた松明を片手に、大きくため息を漏らすと。

「お嬢様は、一度好きになると頭をお病まれになるだ、劇愛や溺愛なんか生温い。お嬢様はこの17年の人生で二、三百のペットを全て情で衰弱死させたお方だ。デカガメ（ゾウガメ的な亀）を衰弱死させられた際は、旦那様も驚かれたもんだ」

ペットと言っても元はモンスターが殆ど、下手な冒険者よりモンスターを殺戮している事に気付き、タンは戦慄し、青年を取り合うお嬢様をみる。

「ちっちなみに、デカガメはどんな死に様を。埋めたワーキャットは、最後酷く痩せ細り、毛が抜けボロ雑巾より悲惨でした」

タンはあの発狂して死んで行ったワーキャットを思い出し、背中に嫌な汗を感じる。

「亀はな。突如首を激しく振り回し、甲羅の中に潜っては出て潜っては出てを繰り返し…」

「繰り返して、それで？」

「亀なのにな、最後引っ込むと激しく甲羅を痙攣し始めて首を突き出し。……猫が絞め殺される様な叫びを上げ、泡吹いて死んだよ」

スーニとタンは、青い顔で自分達のお嬢様を見つめる。

その先の命の恩人に、どうか、せめて安らかな最後を祈る2人であった。

「ええい、仕方ない」

2人に拘束された刃はついに業を煮やす、瞬時に深く沈み2人の拘束を緩ませ、圧縮したバネの様に上に翔び逃げ出す。

「まったく、近頃のお嬢さんがたは逞しいね」

抜け出し、着地した刃はそう言うのと。

サッサと洞窟へ向かう。

「やだあ、逞しいだなんて」

その背後で何故かクネクネと悶えるフイーエに、不思議なモノを見る様にアヤが一瞥し、刃と並ぶ。

「なんなの？あの子？」

「まあ、あまり気にしない事だ」

2人はそう言いながら、革鎧のスーニとタンに一言言って洞窟に入って。

「一気に行くぞアヤ！」

「えっ！ほわあ！？」

入って速攻刃はアヤを抱え込むと、走らずバツタの様に翔びながら洞窟を突き進む。

地面には殆ど足を付けず、左右の壁を浅い角度で次々蹴って行く。

結構な速度と障害物を紙一重で突き進む刃とアヤ。

途中で暴れられても不味いので、アヤには刃の脇下から抱きつく様に腕を回させ、顔は苦しく無い程度に胸中に埋れさせた。

移動中、洞窟内はそれ程蒸し暑くなく、むしろ涼しいくらい。

壁や天井、通路の隅に淡く光る苔が生えているおかげで真っ暗では無いが、ある程度の光は有る。

先程から何度かの深い動きから察するに、何度かの分かれ道を通過した後、刃は跳ぶのを辞めて、アヤを降ろした。

「おっとと」

やはり少し眼を回したか、崩れかかった彼女を支えてやる。

「大丈夫か。さて、これで向こうは巻いたはずだ。攻略ついでに茸

狩りでもしょうか」

「はい♪うゝでも、暗くて良く見えません」

刃の眼は、少しでも光が有れば微光暗視装置の様に光を集める事が出来るが、アヤは普通な為それは出来無い。

「ああ、そうか、そうだよな。：チヨット失礼」

「あつ、え」

そう言うのと彼は何かを探し出し、アヤの眼を優しく手で覆う。

「はい、これでどう」

手が放され、ゆっくり眼を開けると、そこには白い光で照らされた道が見える。

「え、光が。ヤイバさん光の魔法使えるんですか？」

それは刃の右手から発せられ、暗闇を扇状に照らしていた。

「俺は魔法なんて使えないさ、これだよ」

そう言つて、光を発し続ける黒い筒をアヤに渡す。

「それはフラッシュライト。本来はもっと明るく出来るけど、連続使用ならこれくらいいい。アヤが持つてて」

右手に握った八角棒を左に持ち替え、フラッシュライトを握り、あちこち照らしていたみる。

「へェ、これは。：うん便利だ」

始めての道具に、チヨット楽しそうなアヤ。

「そてじゃあ行こうか」

「はい♪」

そうして、二人の洞窟探検は始まった。

見た所この洞窟は自然発生した穴と、オークが掘った穴とが入り交じり、結構深い。

洞窟は下へ下へと続き、オークの穴は地下10m程から横へ横へと続いている。

オークが掘る穴はどれも短く、狭い。

アヤの話では、子を生み育てるマザーの間のみが広く、他は全て横穴で一匹づつこうした寢床があるそうだ。

「へえ、よくそんな事知ってるね。アヤは動物に興味でも？」

「いえ、ただこう言った比較的出会いの可能性が高いモンスターの事は、学校で習うんです」

「危険管理がされてるわけだ。敵を知る事は大事な事だ、それで、王乳茸はマザーの間かな？」

「はい♪恐らくもうすぐですよ。本当なら結構深い場所に住んでいるんですが、ヤイバさんが跳んでくれたお陰で半分は制覇で来てましたしね」

探検

探検

「はは、それは良かった」

確かに、相当走り込んだからな。

特に右脚の脚力が上がってる、左とのバランスが悪いが恐らくはアレのせいだ。

改造処置を受けて以来、文字道理の一騎当千の力が手に入ったが、全てを知るのはDr. Ωただ一人。

いったいヤツは何を考えている、恐らくこの世界に飛ばされたのもヤツの策略だ、それを解く鍵は。

刃はチラリと、鼻歌混じりに隣を歩くアヤを見る。

いったい、彼女に何が。

「あっ♪着きましたよヤイバさん♪」

「ん？ああ、ここか」

そこは確かに他より広く、大きな横穴。

高さは6 m程で、奥行きも有るがところどころ他に通ずる横穴が見える。

気づかなければ、ただの通路の踊り場としか思わなかっただろう。

広く平らな場所には、植物の葉などが積み重なった寝床らしき物が見える。

奥では今、アヤが横穴の一つ一つをライトで照らしている。

「あっ有った！有りましたよヤイバさん♪」

そう言うと、右から四番目。

木の根などが垂れ下がる、横穴の前でライトを振ってきた。

今にもピョンピョン跳ねだしそうな彼女に苦笑しつつ、木の根のカーテンをくぐり中に入る。

「うう、やっぱりカビ臭くてジメジメ」

「まあ菌類だからな、仕方ないさ」

不快な室温とカビの臭いに、少し気分が下がるが。そこに、白い塊が見えた。

「…これが、王乳茸か。思っていたよりデカイな」

「そうですね、市場でたまに見るのもこれの半分ですから。…あつこれが普通ですよ♪」

その茸は、名前通り全体が練乳のような乳色エリンギ。

目の前に有るデカイそのエリンギは群生し、乗用車のタイヤを2個横向きに立てた大きさ、普通のはその半分。

「ちなみに、これは金になるのか？」

「ええ、貴重な茸ですから。持って帰りましょう♪」

そう言う事で、早速オークの尻尾が入った袋に入るだけ詰め込む。

それでも、その四倍の量が群生しているので、後で来るであろうあの3人の分は間違いないはずだ。

「そういえばヤイバさん、隣の横穴は地下へ続いてましたよ。行きますか！」

ほぼ提案でなく、行きたくてしょうがないってな感じの眼で見られては。

「まあ、急ぐ事も無いしね。行ってみようか」

「やったあ♪私こう言った探検大好きなんです！さあ行きましょ♪」
オーク討伐に来ているはずが、何時の間にか洞窟探検。

対した緊張感も無く、隣の横穴を下って行く。

すると、この穴は他より涼しく。

「風が有るし、…ふむ水音だな、地下水がながれているな」

刃は微かに聞こえる水流に耳を傾ける。

「ふくん、何も聞こえませんが。…あつ確かに水の音が聞こえます♪」

「もし安全なら、一度食事をとろう。腹減っただろ？」

「うう、実は昼ご飯食べそこなって」

「そうか、なら急いで安全の確認をしよう」

「はい♪」

そう言って二人は、奥へ奥へと進んで行く。

途中、石や凹みに足を取られたアヤを助けたり。

不意に首筋に落ちた水滴におどろき、刃に飛び付くなど有りながら。

「うわぁ、凄い。なんて綺麗なの」

それは鍾乳洞へ続いていた。

乳白色の氷柱、地面から顔を出すだけのこの様な石筍。

低い階段の様に段が折り重なり、緩やかな水の流れが心地良い。

「アヤ、ライトを」

そう言うと、ライトを受け取り電源を切る。

「へえ、……星空」

光源が消えた鍾乳洞内、だがそこは光の揺り籠だった。

壁紙や天井、水が流れる沢を淡い燐光が輝く。

そしてもう一つ。

「…これは、…蛍。いや違う」

それは浮かび上がる様に姿を表した。

触れようとした刃の指先で、崩れ逝くように消えて行く。

最初は淡雪の様に姿を表し、今や洞窟内全てを淡い発光で染め上げた。

数秒に一度点滅し、まるで生命を表す光の様に輝いては消えていった。

アヤはその姿に眼を奪われ、ただただその一瞬一瞬に心を満たしていく。

刃はそんな彼女の横顔に微笑を送ると、ざっとまわりの気配を感じるが、生物はいない様だ。

休憩

休憩

鍾乳洞と洞窟繋ぐ道の脇。

背もたれとゆっくり座れる場所を見つけ、食料を袋から取り出し、その袋を半分に折って地面に敷く。

「アヤ、こちらへ。食事にしよう」

今だ神秘的な光景に、心奪われた彼女に歩み寄る。

「：へ、ああすいません」

「いいさ。こっちへ」

少しボーとしていたアヤを連れ添い、袋の上に座らせる。

「えっとう、ヤイバさんもこちらに」

「なに、気にし無いでくれ。君を地面に座らせるのはどうもね」
それでも遠慮するアヤを、座らせ水とバスケットを渡した。

「ほう、これは旨い。チーズと野菜だけだがなかなか」

「これ、シスターのサンドイッチですよ。学生の時以来です」

30cm程の細長い堅焼きパンの中には、トマトやピーマンに似た野菜と、硬めのヨーグルトの様な癖の無いチーズが挟まっていた。

2人は言葉少なめに、この神秘に見入っていた。

いっしか食事も終え、適度に腹も満たされつつも、その刹那的な光景を眼に焼き付ける様に、休憩の時間を楽しむ。

そんな静寂の中、アヤはチラチラと刃を見ながら。

「あの、ヤイバさん」

「何かな」

隣で片膝を立て座る刃と眼が会う。

「えあつと：ヤイバさんの国は、どんな所何ですか？」

淡い光の中でもわかる程顔を赤くしたアヤに、彼は微笑みつつ、遠くを見つめ。

「そうだね、一言で言うなら戦争ばかりの国だよ」

その眼は遠くを見つめ、何も写さずにただ光を反射するばかり。ばつが悪くなったアヤが、気まずそうに謝るが、また彼は微笑み。

「はは、いいよ別に。生まれた頃から戦争してた国だ、別に気にしてない。それに、それにだねアヤ。あの国にもこう言った美しさが有ったし、馬鹿やって笑っていられる戦友もいたんだ」

「：ヤイバさんは、帰りたいですか？自分の国へ」

アヤは何処か悲しげな笑みを浮かべながら聞いて来るが、刃はゆっくりアヤに顔を向け、その瞳を見る。

「帰る気はないよ、今はそれより大事な事が有る。その為にアヤ、すま無いが君を巻き込む」

刃は先程の虚空を見る瞳で無く、決意の瞳でアヤを見つめる。

それは力強く、なすべき事が有る者の瞳。

「ふふ、任せて下さい。私達は相棒じゃ無いですか、一緒にがんばりましょう♪」

柔らかなほほえみを浮かべ、アヤは右手を差し出した。

刃はその微笑みについて頬に熱が入るが。

「よろしく頼む、アヤ」

握手を握り合った2人は、互いに今日で何度目かの契りを交わした。

「そう言えば基本的な事聞いて無かったけど、契約で現れた俺のようなのはどう生活すればいいんだ？まさかアヤの稼ぎで飯を食う何て俺は納得しないからな」

少々大袈裟に眉間に皺を寄せ、睨むように刃がそう言うと、アヤが可笑しそうに笑い。

「ははは、えっとまあ普通はそうなんです。ヤイバさんも納得いかない様なので。そうですね、ヤイバさんの特技は？」

「特技は市街地戦闘に斥候、銃器は個人装備火器はあらかじめ扱える」自信満々に答える刃と逆に、何が何やら理解出来無いアヤ。

「えっと、市街地戦闘？街での戦いですか？石膏ってあの固まるやつで。ジュウカキ？個人装備？何ですか？それ？」

まるで意味が繋がらない単語と、聞き慣れ無い言葉に困惑する。

やっとその事に気付いた彼が。

「ああつとな、まあ戦いメインな仕事なら自信がある。後は要人警護、誰かを護ったり時間稼ぎも出来る」

「それなら冒険者に成られる方が無難ですね、貴族の私兵も有りますがちよつと…」

なにやらあまり良い印象では無い様子。

月の話し

月の話し

「俺も貴族や財閥には関わりたく無いしな。まっとりあえずは」
少し暗くなった雰囲気を壊す様に、刃は一気に立ち上がり。

「帰ろうぜ、アヤ」

少年の様にニツと笑う。

「そうですね。また今度、友達を誘ってここに来たいです」

「ああ、護衛は俺がする。皆で楽しむが良いよ」

「ヤイバさんも、その時は楽しんで下さいね」

そう言って2人は鍾乳洞を抜けていった。

途中恐らくフイーエの怒鳴り声だと思われる声が響いたが、触らぬフイーエに祟りなし。

関わらずに洞窟を抜けて行く。

途中残党のオークが何匹か襲って来た為、成敗し尻尾を頂く。

「こんなに沢山、要らなく無いかな？」

「でも、返り討ちとは言え殺生ですから。そのまま放置もどうかと」
ようは殺さず撃退が良いんだろうが、つい条件反射で急所を一突き。
途中殴る事に切り替えたが、下手に手加減すると再度襲って来る、
入れすぎると脳挫傷や内臓破裂。

いままで必殺の心で磨いて来た技が、人以外での手の抜き方に苦戦する。

そんな、刃としてもそれなりの訓練が詰め、袋もパンパンになりながら外にやっと出て来れた。

外は星空、半分に砕けた月が美しい。

「……何だって!？」

満点の星空に、半円が二つ並んだ月が輝いていた。

その月を見上げて立ち止まる刃に、アヤも同じ様に空を見つめた。

「月が、どうかしました？」

「どうかって、月が割れてる」

刃は眼を見開いて空を指差すが、その姿が面白いのかクスクス可愛らしくアヤに笑われ。

「月が割れてるのは当たり前じゃ無いですか、あれは神の裁きを受けた結果です」

さも当然のように言われたが、コッチの常識とは違い過ぎる。しかも、神の裁きねえ。

「結構過激な神だね。何で月を？」

「昔話ですが、聞きます？」

「頼むよ」

そう頼むと、はにかんだ笑顔から、少し大人びた表情で。

「ではまず、月には悪魔が住んでいました。その悪魔は私達の、この大地に巨大で凄まじい速度の稲妻の矢を放ってきました。それも一撃で地面が大きく抉られ、街は木の葉のように吹き飛ばす程の強力な矢を。悪魔達は炎の鳥に乗り次々にこの大地にやって来ます、私達の先祖も降りて来た悪魔達に戦いを挑みましたが、抵抗虚しく。悪魔達は人々達に家畜になる様迫ったそうです、もし断れば全てを焼き尽くし、誰一人生かしてはおか無いと。そして、悪魔達は次の満月迄に答えを出す様言って、月へ帰って行きました。先祖達は屈辱的な家畜になるくらいならと、地上に残った悪魔達に最後の最後まで、戦い、散って逝きます。ですが、悪魔には勝てません。剣も魔法も効か無いのです。悪魔は火を吹く武器に、巨人の鎧で次々に人々を殺して行きます。何とか押す事ができても、悪魔が引くと同時に稲妻の矢が降り、国を、街を焦土と変え、人々はなす術がありません。私達は満月を呪いながら待ちました、先祖達は残った人々全てでの最後の攻撃を準備していたのです。ですが、奇跡が起きたのです。その満月の日、月を一本の光が走り、月が二つに割れ月の至る所で光が瞬きました。そして、光の中から神々の船が現れたのです。聖なる光で月を焼き、我らが大地へ落ちて来ました。地上の船と、空の船が悪魔達の矢を次々焼き払い、飛び来る岩おも焼き

払い。最後、轟音と共に二隻の船が月の左右に飛び込み、全てを焼き尽くす白き光が月を包み、我々は救われたのです。そして、歓喜に震える我々の前に、神々が降りてこられました。神々は恐れ多くも我々と同じ姿で出てこられ、疲弊した我々に新たな友と、神の奇跡を授けられました」

友と奇跡、それは一体。

「神は何を残したんだい？」

「それは新たな種族です。知識の友エルフ、シスターや司教がそうですね、次が技術の友ドワーフ、我々の様に悪魔に襲われ、神に助けられた獣人方々でした。そして奇跡は」

アヤはジッと刃を見つめ。

「神は言われました、大義で有ったと。そして、大義をなす術、召喚の奇跡を与えて下さりました」

帰り

帰り

何と凄まじきその心、大和魂が熱く燃え盛る話だ。

プロパガンダでも、士気が上がる。

だが、俺の世界でもオーバーテクノロジーの箱舟は発見されているが、こう言った話は残って無い。

Ωの言ってた事とも繋がる。

それに気になるのがエルフとドワーフ、もしやこいつ等は人口生命。半壊した箱舟から得られた技術で、キメラや改造兵は作られたんだが、その技術を持った奴等の作品なら。

成る程、Ω、貴様の目的は技術の完全なる確保つと言ったところか。だが、しかし

「ちょっとヤイバさん！ヤイバさ〜ん！！」

「んあ、すまん。チョット考え事がな」

「もう！せっかく話して上げたのに」

つい考え過ぎてアヤを置き去りにして仕舞ったか。

「悪い悪い、では……。どうするこれ？」

とっとと帰ろうと思ったが、洞窟入り口の広場に散乱する、オークの屍。

引きづられた跡が有る事から、何体かわ食物連鎖に加わったようだが。

「マザーは流石に誰も持ってかねえわな。仕方ない」

俺はおもむろに荷物を下ろし。

「？どうしたんです？」

「ちなみにだけど、マザーの尻尾も食うの？」

「食べますよ。オークのより霜降りが良くて、ステーキに最適なんですよ〜♪」

そう言うのと、なんとも至福の表情で、マザーの尻尾を見つめる。

今ならナイフ渡すだけで剥ぎに行きそうだな。

「チョット待ってろ」

そう言い残すと、俺は森の中へ入り、目当ての枝と丈夫そうな蔓を見つめ帰って来る。

「早かったですね、何するんです？その棒？」

抱えた枝を地面に置いて、何かし始めた刃を見つめる。

「何、簡単な背負子さ」

そ

材料は、一握り程の太さで、長さ50cm程の棒四本、そのうち二本を真ん中で切る。

出来た25cmの枝と50cmを組み長方形に、最後に交わる部位に突き出すよう二本を当て、それぞれを蔓で縛り、突き出た二本の頭と背の部分の頭に補強用の蔓で二等辺三角形のように結び。

おい紐を付けて完成、出来合いの背負子。

なんせ王乳茸で一袋一杯で、更にオークの尻尾とマザーの尻尾だと溢れてしまう。

回収出来るだけ回収し、後は死体ごと森の中へ満遍なく放る。

アヤには背負子に戦利品と袋を縛るように頼んで置いたので、後処理は俺一人。

流石にマザーは大きく、アヤから見えない位置まで引きづり解体。部位ごと投げたが、胴体はちと重かったな。

そんな後処理を終えた時、不意に洞窟から松明の光と罵声が聞こえた。

「帰って来た、行こうアヤ」

「はい！」

すぐさま背負子を背負って、2人で走り出す。

途中何故か可笑しくなって笑い出したが、まあ大丈夫だろう。

こうしてオーク討伐は、ちょっとした寄り道をしながらも、後は戻るのみ。

森を抜け、町への道を歩き出す。

「ヤイバさんて、面白い人ですよね」

「どうした、いきなり」

町の光も見えて来たところで、そんな事を言われた。

「最初はと言う人か分かりませんでしたけど、この試練でヤイバさんを知れた気がします」

「そうか、期待に答えられたかな？」

「ええ、勿論ですよ♪精霊でも魔獣でもない神託の友何て、今迄聞いた事も有りませんでしたけど。私、ヤイバさんに出会えて良かったです」

そう言うのと、刃の顔を真っ直ぐ見て微笑んだ。

その笑顔は月光にさらされ、ひととき美しく、その言葉と共に、ヤイバは赤くなる。

「…どうしたんですかヤイバさん、黙っちゃって？」

「いや、その、何でも無い」

アヤには逆光になっているせいで、ヤイバの顔が見えないが。

「何でもない事ありませんよ、どうしたんですか？私気になります」

「問題無い、さあ行こう。夜道は危険だ」

そう言うのと照れ隠しに走り出す。

「えちよっと！危険で、大丈夫ですって！ヤイバさん！」

こうして、月光の中を走る二つの影。

静かな轍を騒がしく走りぬけ、前の影が後ろの影を気にしながら、町へと走って行った。

教会

教会

「これはこれは、大量だね。しかもマザーの尻尾に王乳茸まで。僕は殲滅とは言って無いよ」

「ついでだ」

「もう！ヤイバさん、いきなり、走らないで下さいよ！私でも、追いつけないんですから」

あれから恥ずかしさのあまり走り出した刃を追いかけて、アヤが一生懸命ついて行ったが。

教会の食堂に入りこんだ瞬間、ぐったりと机に突っ伏した。

丁度食事も終え、お茶を楽しんでたエスクとマヤ兄妹はいきなり飛び込んできた刃に驚き、アヤの状況に眼を丸したが。

無表情で若干頬が赤い刃が歩み寄り、無造作に戦利品を突き付け確認を頼んだ。

そして今、エスクは品を確認し、マヤは2人のお茶をいれに部屋を出る。

だが、平然と腕組みし立っている刃に比べて、アヤは息も絶え絶えに疲れて果てていた。

それを何とも可笑しそうに見つめるエスクは。

「凄いな君は、アヤより速く走れるのか。彼女は獣人と徒競走が出来る逸材なんだが」

「走りは軍人の基本だからな、民間人には負けんさ」

「そう言う意味じゃ、ないんだが」

無表情にさも当然と斬られ、苦笑が漏れる。

「ほらほら、お茶いれたわよ。アヤにはお水もね」

「有難う、シスターあ」

食堂に入って来たマヤが、刃とアヤにお茶を渡す。

立っていた刃も、机にへばってるアヤの隣に腰掛け。

「しかし本当、沢山狩られましたね、オークの尻尾がこんなに、しかもマザーまで。そこ等の冒険者と大違い」

マヤは机に並べられた尻尾と茸を眺め、小言が零れる。

「ふむ、普通だとどの位だ？」

「そうね、それこそ最初言ってた通り10匹前後よ。マザーなんて5人組で仕留めに行く大物ですし」

刃は茶を飲みながら、あの皮鎧2人を思い出す。

「まあ下も上も限りがあるまい、その冒険者とは何なんだ？」

その問いにはエスクが反応した。

「ああ、そうだね君は知ってた方が良いだろ。簡単な話し荒事の処理が主だよ」

「俺でもなれるか？」

その話に少々真剣な声で刃はエスクに聞く。

彼は一度眼を細め、一口茶を飲み。

「そうだね、今のご時世誰か保証人がいれば良いんだが。：なんなら僕が保証人になるよ」

「良いのか？お前聖職者だろ、こう言った仕事とは距離を置いた方が」

「ふむ、確かにそうだろうね。でもそれなら何故こんな試練が有ると思う？」

「それは力の代償と、振るう覚悟の為。じゃないのか？」

「ほう、唯の兵隊かと思えば学が有る。それも正解だが、君はうちの神を知っていたかい？」

「いや、歸りにアヤから聞いたぐらいで。益荒男の様な神だな」

「ふむ、まあその通りだが。マヤ、我等が旗を」

エスクがそう言うと、マヤは立ち上がり食堂を出て行く。

暫しの沈黙。

そして、帰って来たマヤが持つ大きな旗。

「おい！あれは、冗談か！？」

「君はこれを知ってるようだね、聖職者しか意味を知らないのだが」

それはまさに軍旗。

二本の対角線で四分され、黄、黒、赤、青。
それが意味する物。

「不転の乙旗」

刃はその旗を驚愕と共に迎え、エスクが立ち上がり、アヤも恭しく片膝を着いた。

「我等が神は悪魔との戦いでこう言われた。この星の興廃この一戦に有り、兵士達よ一層奮励努力せよ」

その言葉もまさに、日露に置いての連合艦隊総司令長官のお言葉。刃は鳥肌が立つ様な歓喜に震え、素早く直立し、不動の姿勢から音が出そうな拳手の敬礼を送る。

日本人として、日本陸軍の一兵士として、鳥肌と涙が溢れる程の喜びであった。

一億玉碎で二分された国土と、日本人としての誇りが今、異世界で歓喜に泣いていた。

刃が歓喜に震えていると、乙旗はマヤと共に退席し。

「なんと言うか、君はウチの信者だったかな？見事な敬礼だったよ、神衛隊を招いたつもりはなかったが」

苦笑いと呆れの眼でエスクは刃を見る、本人は自分の心に従い行つたので理解してない。

何が悪いと顔を顰めた刃に、アヤが上手く入る。

「えっとう、ヤイバさん。実はさっきの敬礼なんです、教会の神衛隊のやり方なんです。私達市民は片膝を、神職者はお辞儀で、組織や教会を預かる高位の方が頭でやられるそうです」

「そう言う事だ。君のは真に神衛隊、しかも原理主義者のそれだ」
何ともだるそうに椅子に座り、茶を飲むエスク。

一日の閉め

一日の閉め

「だがなエスク、俺の国では皆こうだぞ、特に軍人ならこうなる」

「よしてくれ、そんな暑苦しい国。考えたくも無い」

取り敢えず椅子に座り、少し話すが。

どうやらエスクは、その神衛隊が苦手なようだ。

「その親衛隊はどんなところなんだ？」

「よしてくれ、頼むから信者入りするなよ。神衛隊に入るなら、二度と来ないでくれ」

「そんなに嫌いなのか？」

「嫌いというか、激しく苦手だ」

そこでマヤが帰って来ると、そそくさと刃の隣り。

「えっちょつとシスター」

アヤを押しつけ刃の手を両手で握り締め、あの爆乳に埋められた。

「えああおい」

一気に真っ赤になった刃はしどろもどろ、助けを求め様とエスクを見るが。

「僕は知らない」

アヤに目をやれば。

「む、ヤイバさん、所詮男性ですよね」

凄いがンを飛ばされ、刃丸轟沈。

「はあ、先程の敬礼。私感激いたしました、あの様な美しく機敏な敬礼。歓喜に震えるその眼差し、まさに聖職者！ヤイバさん、御一緒に神衛隊へ」

「えっと、マヤは親衛隊なのか？」

まるで夢見る少女の様な顔で、眼を輝かせるマヤ。

「はい、兄が五月蠅いので何時もはポケットの中なんです。ほら」
そう言いつつも手は放してもらえないが、マヤの修道着の襟元で輝

く。

「それは、鉤十字！SS！」

そう、マヤは襟首にはハーケンクロイツと、SSのバッジが。

「流石知ってらしたのですね、ですがこれはZZですよ」

何と、まさか旧同盟国までもが。

「これは神の導き、さあ今から私の部屋へ。早速神衛隊の事を教えて差し上げます、ささ此方へ」

そう言っ立ち上がらせると、今度は腕が夢の双丘へ挟まれ。

「まったく」

「ピヤッ！」

小さくエスクが呟いたその瞬間、マヤに落雷が落ち。

「おおっと。エスクやり過ぎじゃあ」

「僕の時もやられるんでね。まあマヤがこうなったのは本当久し振りだけどね」

刃は電気ショックで気絶したマヤを抱え、長椅子に横たえる、心配したのかアヤも様子を見に近寄る。

「マヤはそのまま良いよ。2人について来て」

エスクは残ったお茶を飲み干し席を立ち、そのまま扉を開け。

「ほら、早く」

2人も少し考え、エスクの後に続く。

そのまま教会を後にした3人は、近く蔵のような建物まで連れて来られた。

扉は大きく分厚い木製で、観音開き。

エスクが重い扉の片方を開け、中に入っていく。

蔵に入ったエスクに従い2人も続くが、そこは闇しか存在し無い場所だった。

かろうじて窓から差し込む、星の輝きのみが青く輝く。

「エスク、ここはどうしろと」

中央まで移動したエスクは、刃とアヤの脇を通り出口へ向かっていた。「あれ、見えてるのか。まあ安心しろ、朝には開ける」

そう言い残すと、蔵から出て行き門を閉じた。

「えっ！開けるってちよっと！」

アヤは慌てて門に駆け寄るが、無情にも門と鍵が閉まる音が響く。

「それじゃ、お休み。中の水や食料は好きに食べて良いよ」

「ちよっと！待ちなさいよ！コラァ！」

アヤの叫びも虚しく、遠いていく足音。

「仕方がないさ。恐らくはこれも試練さ」

先程の洞窟よりも暗い闇が、この蔵を埋めていた。

「うう、でも」

「ここに干し草のベットが有る、それを使うと良い」

刃はまだ窓からの光で見える為、部屋を見るが。

この蔵、本気で何も無いな。

干し草の脇に、ビンとパンが籠に入っているくらいか。

「アヤ、見えるか？」

「うう、無理です」

刃は門の前でキョロキョロするアヤに歩み寄り、そっと手を握る。

「足下に注意だ」

「…はい」

蔵

蔵

2人は闇を歩き、干し草へたどり着く。

「今日は疲れたろ、もう寝ろ

「えっと、ヤイバさんは？」

「俺は地べたで寝るから、気にし無いでくれ。それじゃ「待って下さい」

刃が遠ざかろうとしたその時、アヤの手が刃の左手を掴んだ。

「あっあの、いい一緒に」

「おいおい、そんな無理しなくても」

「無理してません！信じてますから」

そう言うのと、いっそ強く手を握る。

彼女は恥ずかしいのか完全に下をむいている、これで嫌とは言え無いな。

「分かった、有難く寝かせてもらおうよ」

「は、はい」

多少の緊張の中、ゴソゴソと互いの場所を調整して行く。

あり程度スペースを決め、2人は干し草のベットに横になったが。

大きさはセミダブル程で、その上に2人。

必然的に2人は背中同士をくっ付けて横になる事に、背中越しから互いの心音と体温が伝わって行く。

初め、大きかった心音も、徐々に小さくなり、やはり疲れていたのだろう直ぐに規則正しい寝息が聞こえて来た。

刃はチラリと脇のアヤを見る。

「眠ったか」

そう言っ、少し体を放し立ち上がろうと。

「ううん」

突然の寝言に、体がこう着する。

油の切れたギアの様な首を回し、隣を見る。

よく見ると寝返りをうったようだが、シャツブラウス一枚でわ心許ない。

上にかけてやるものが蔵には何も無い、寝冷えされても。

：そうだ。

刃は自分の上着を脱ぐと、アヤに被せてやる。

一瞬チョットした反応を見せたが、上着を手繰り包まってくれた。なんとも可愛らしい寝顔だが。

よし、これで俺は地面なん？

立ち上がるうとしたその時、何かが左手に絡む。

何事かと思えば、アヤの腕が絡まって来たのだ。

飛び跳ねた心臓を落ち着かせ、一度横になり抱えられたアヤの腕を外そうと。

うっ！こんな事、軍学校で習って無いぞ。

手をほどく為、アヤの隣りに横になったが、何を思ったかそのままクルリと寝返りを打って、刃の腕を腕枕に。

そして、最終弾到着く。

「ふうん」

まだ、後頭部しか見えなかった為助かった、だが状況は緊迫する。

敵は突如、侵入防止柵を乗り越え、地雷原を突破した。

ゆっくりと翻り、顔にかかった髪がベールの様に解ける。

小振りな唇が小さく開き、甘い吐息が頬を撫でる。

だが、こう言った状況に慣れてい無い刃にとって、その吐息がかかると同時に、謎の興奮部質で鳥肌が総毛立つ。

「ふふ」

酸欠状態の金魚の様に慌てふためく刃。

だが間近で見た、その微笑んだ寝顔を目にし、何故か微笑と共に落ち着きを取り戻す。

ずり落ちた上着をそっと掛け直し、その寝顔を眺め、紅の髪が一房鼻に掛かかったのを退けてやる。

まだあどけなさが抜け無い顔、可愛らしく描かれた微笑みが、心を温める。

今迄忘れていた何かが、刃は今確かに穏やかなる安らぎを感じている。

一週間不眠不休で戦える体で有るが、何故だろうこの気持ち。

女性特有の甘い香りが、更なる安心感を与え、いつしか刃も夢へと落ちて行った。

蔵（後書き）

有難うございます、始めてポイントが頂けしかもお気に入りまで。
私七転八倒、マジで涙が（T ^ T）
どなたか存じませんが、誠に有難うございます。
これを励みに誠心誠意努力して行きます。

新しい朝

新たなる朝

爽やかなる空気に、朝の訪れを感じる眩しくも暖かな光が差し込め。家々の窓が開き、新たなる一日の始まりを迎える。

されど、今だ夢から覚めぬ者も。

肌寒に身じろぎし、熱を求め手が伸びる。

肌で感じた温かみに、身体ごと摺り寄せる。

クッションにしては硬く、潜り込み抱きしめたそれからは、穏やかなる鼓動が聞こえる。

そのなんとも言え無い安心感と温もりに、またしても深い眠りへ落ちて行く。

そう言えば私のベットに、こんな大きなクッションが有っただろうか、それにベットも何か変。

寝ぼけた頭で、いろいろな違和感が浮き上がる。

無意識に眼が開き、まず始めに見えたのは呼吸する様に上下する濃い緑色。

近過ぎてよくわから無い。

頬を摺り寄せると、滑らかな肌触りと硬くも柔らかい感触。

「ふふん♪」

心地の良い感触に、抱き締めた腕ごと顔を埋め、その感触を堪能している。

「…うんあぁっ？」

「？」

抱き締めていたそれが身じろぎ、上から低い声が。

頬を滑らせ、顎と首を乗せたまま上を向くと。

「……お、お早う…アヤ」

見上げると綺麗な黒い瞳と、黒髪の人が困惑顔で頬も真っ赤に朝の挨拶。

アヤの寝た呆けた頭に一泊を置き、落雷が落ちた。

「あつ、あああああ！ゴメンなさい！」

抱き締めていた腕を即座に解き、あたふたしながら転がり落ちるように逃げ出す。

藁のベッドから逃げ出したアヤは、恥ずかしさに背を向け、背後からでも見てわかる程狼狽している。

刃も刃で、顔を真っ赤にして胡座をかき湯気が出ていた。

「いや、まあ、こう言う事も有る」

「うっうう、すいませんつい」

2人共真っ赤で、朝の眠気など吹き飛んで仕舞った。

「俺的には得。イヤイヤそうじゃ」

刃も熱暴走した頭で口を滑らし、室温が上がる。

熱せられた2人の間に、あたふたした沈黙が続いた。

どう切り出せば良い、2人はこの状況の打開策を考えるが…

その時、アヤはふと今迄掴んでいた布に気付いた。

それは肩から掛かる、真っ黒な上着。

これは、刃さんの。

肩口から後ろを伺うと、胡座をかいて煮詰まっている刃。

彼は上着を着ておらず、濃い緑色のタンクトップ姿。

鍛えられた腕と肩、厚い胸板が見える。

つい見惚れてしまい。

いいいけない、何見惚れてんの私。

熱を増した顔を振り、急いで顔を戻す。

このままではいけない、でもどうしようう。

アヤも、煮詰まりだした頭で考える。

肩に掛かる上着を引っ張り、胸の前で抱えてまた、どうする、どうしよう。

自問ばかりで答えが出せ無い、ほぼフリーズ状態の彼女。

藁が崩れる音にも。

背後から、おずおずと近付く影にも気付かず。

「ヒャウッ!!」

上気した頬に、冷んやりとした冷気が触れた。

「あついや、すまない……喉が乾いたかと、思ってたな」

驚きです振り向くと、刃が籠を抱え、ビンを差し出していた。

だが彼も、頬が赤く、眉間に皺を寄せ、眼が忙しく泳いでいた。

ほうけたまま、突き出されたビンを受け取ると、なんだか無性に可笑しくなる。

私だけじゃないんだ。

ビンと上着を抱えたアヤは、くすくすと笑出す。

籠を抱えたまま、チョット驚いた刃も、頬が緩む。

多少の気恥ずかしさを残し、2人は小さく笑い合っていると、藁のベッドに腰掛けた。

「あの、上着有難うございます」

「ああ、うん……」

おずおずと差し出された上着を

一瞬躊躇し受け取り、彼はそれを羽織った。

羽織った瞬間、また赤くなったが。

若い男の気持ち、汲んで頂きたい。

女性に貸した上着は、カンフル剤か興奮剤なみ。

「ヤイバさんの服、右肩から破れているんですね」

アヤは、服を抱えていた時感じた事を言ってみた。

刃は軽く肯定しながら、籠のパンを渡し。

「チョットね。ここに呼ばれる直前の戦闘で破れたんだ」

散歩

散歩

何でも無いかのように彼はそう言うと、手に持ったパンを食べる。
アヤも、パンを千切りながら食べ。

「良かったら補正出来ますよ。ウチは仕立て屋やってますし、外の国から服を入れていきますし」

「へえ、仕立て屋かあ。成る程、服のセンスが良いのも納得」
刃はアヤの服装見る。

昨日の皮鎧は、何かボロい布シャツとズボンだったし、どうもアヤの服装が近代的で布地も良い。

「へへ、煽てても何も出ませんよ。褒められるのは嬉しいですけど」
仕立て屋の嫁の服が最悪、何て海外の諺が有ったけど、それは当てはまら無いな。

「でも、良いよ。ほら俺の服特殊だから」

そう言って襟を引っ張ると、黒からカーキ色へ変わった。

「ああ、そうでしたね。…あつても確か……」

そう言うと天井を見ながら考え出す。

刃も何となく見ながらパンを食べ終わり、水を飲んで待つが。

ゆっくりと門の近くから足音が聞こえる。

それは門の前で立ち止まり、鍵を外し、門が抜かれる。

刃は門の脇に立つと、アヤは慌ててパンを咀嚼し、水で流し込む。

徐々に開いた門から。

「やあ、お早う。親睦は深められたかな」

呑気に顔を出したのは、エスク司教だった。

「おかげでな。それで、その荷物は？」

出て来たエスクに、御座なりに挨拶し、足元の布袋を指差す。

「これは昨日君達が採って来た戦利品だよ」

確かに見覚えの有る袋だ。

「とりあえず出て来て」

エスクがそう言って、刃とビンを入れた籠を持つアヤが続いた。

「お早うございます、エスク司教」

「うむ、お早う」

：はて、牢屋で見たアヤのエスクに対する態度に温度差が。

アヤのエスクに対する社交辞令的な挨拶に、小さな疑問を感じつつも。

「それじゃあヤイバ、君達の戦利品だ。自分で持ってきてくれ」

「ああ、構わんが。何処に行くのか」

「昨日言ってたが、冒険者への登録と戦利品を買い取ってもらう為にギルドに行く。もう少しゆっくりして行くつもりだったが」

彼に何か有ったのか、疲労のため息を漏らす。

「マヤがね、あの夜からうるさくて。今も気絶させているんだよ」
成る程、そう言う事か。

朝からあのテンション、恐らく俺が加われば青天井間違い無いしな。
エスクとしては、とっとと送り出してゆっくりしたいのだろう。

「大変だな」

「仕方ない、兄妹だからね僕達」

そう言って、刃が荷物を抱え出すと。

背後で立っていたアヤに、エスクは教会で待つて居るように言付、
エスクと刃は町の中へ歩いて行った。

舗装されてい無い轍を歩いて行くと、小さな民家が数軒見受けられるが。

「この辺りは何かの保養所か何かか？」

民家を見掛けた後は、石造りの大きな二階建の宿や寮が続く。
道も轍から、石畳みで舗装された綺麗な道だ。

「ああ、この町は遺跡の関係上工業が出来無くてね。必然的に観光や、遺跡に関する教会施設や、我々エルフと人間達の研究所に学校が主だね。まあ平和な土地だよ」

「工業が出来無い土地か、遺跡の保護目的か？」

「そんなものだ、帰りの馬車でアヤと話すと良い。馬車は楽だが、暇でしようがない」

ふむ、そう言う事なら後でいいか。

そうして、長い平屋や、白塗りの大きな施設を眺めつつ、町を歩いて行く。

だが、行くところ行くところ、エスクは信者や聖職者に駆け寄られ、挨拶と共に日々の感謝の言葉攻めで引きとめられる。

信者でも無く、宗教に思い入れが有るわけでも無い刃は、その輪から抜け出し、傍観者を決め込む。

流石は司教、高位のお方は大変だ。

中身が幼女主義者で有ろうと、偉い奴は偉い。

そんな事を思いながら、ぼんやりと立って挨拶が終わるのを待つしかなかった。

ギルド

ギルド

度重なる信者包囲網を抜け、何とかお目当ての場所まであと少し。

「凄いな。よくアレだけ揉みくちにされて、平然としてられる」
刃的には良くやるっと言った労いと、呆れ半部でつぶやく。

「なに、もう150年聖職者をやっているんだ。慣れだよ、慣れ」

「へえ、150年か、それはそうって150年！お前幾つよ！」

一瞬素通りしかけた言葉を引き止め、つい声上がる。

「今年で165になる。まあ我々エルフは、平均300まで生きるからな、やっと折り返しぐらいだ」

淡々と話すエスクと違い、刃はそんな長寿な人種がいる事に驚き啞然。

「君の所には居なかったかい、召喚の間の事を知っていたので、いるものだ。私達エルフやドワーフは、神が形と生命を与えられし人間達の兄弟だ。そちらの神は友人や兄弟を残されなかったのかい？」

「残念ながら、こっちで言う神の船の残骸だけだね。生物は0だったよ」

「そうか……」

そう言うのと、何処か寂しそうに空を見つめ、歩き出した。

その寂しげな背中に、僅かな哀愁が漂う。

そんな無言状態が続きながら、長い堀の脇を歩き続け。

「何だ、役所みたいだな」

「ギルドは国が民へ委託して行っているからね。こう言った施設が一般的だ」

開かれた門扉から見たそれは、田舎の村役場つと言った佇まい。

それなりに広い敷地に、I字型の石造りと白壁のロッジ。

門から真っ直ぐ入り口に伸びた道は赤煉瓦が敷かれている。

両サイドは庭になっており、芝生に休憩用のベンチ。

こんな人畜無害な市民の憩いの場が、ギルドとは。

刃の予想では、昼から飲んだくれが集まる酒場と思っていたが。

勝手な予想を訂正しつつ、エスクと共に入り口の扉を開け入って行く。

扉に付けられた鈴が軽やかに鳴り、人の出入りを報せる。

入り口は丁度建物の中央に設置されており、入ってすぐ左右に続く道が続いていた。

室内は思った通り、高級ロジックと言ったところ。

面を整えられた岩壁、ニスを何重にも塗られたような赤い木目廊下。高い天井には、立派な太い一本大木から切り出された、継ぎ目がない梁。

これに動物の毛皮と、鹿の剥製が有れば完璧と言って良いほどの完成度。

目の前に受付の女性が2人座って居るが、エスクを見ると立ち上がる。

そのまま構わんと手で制するするが、2人はそのまま立ち上がり、頭を下げ腰を下ろす。

エスクはそのまま右側に歩いて行き、行き交う人々全てに挨拶され、それに返して行く。

またしても司教様々なんだろうと、他人のように後に続いて、何と無く周りを見ておく。

先程から見る男女、この中でデザインが統一された紺色のベストを着た人達が、恐らくギルドの職員。

その他は朝だと言うのに、もうから待ち合いのような椅子に座る人達。鉄製の鎧姿は見えないが、皮鎧や鉄製の胸当て。

剣や槍に弓矢、それに彼等から漂う独特な空気。

その顔も歳も千差万別、戦時前の新兵と補充兵のようだ。

そんな彼等の視線を浴びつつ、エスクに続いて一つの部屋へ。

何も気にせず入って、ここは…

「エスク、ここで良いのか？」

「ああ、間違いないよ。君も座りなさい」

そう言うと、まるで自分の部屋かの様に歩き、高級そうなソファに腰を降ろす。

刃はこの部屋の高級感に、啞然とする以外無かった。

基本、軍関係や研究所以外一般的な施設に出入りした事が無い彼には、その部屋は驚きに満ちていた。

そこには、クッションが薄いパイプ椅子でなく、なめし革の高そうなソファが二つ。

スチール製の業務机は見当たらず、ソファどうしの間に樹齢数百位の大木が、年輪のうねりも鮮やかに鎮座していた。

見張りか伝令の兵士は居らず、実用か観賞用か、黒光する重厚な西洋風全身甲冑。

壁に数多く並べられた鞘入りの剣。

無機質なコンクリート建築物や、バラック小屋、地下研究所。

刃が向こうで出入りしていた建築物は、そう言った物ばかり。

このような所来た事も無く、おずおずとエスクの隣に腰掛けるしかなかった。

ギルド長

ギルド長

無駄に座り心地の良いソファで、やっと慣れて腹を括って待つ事数分。

「いんやあすまん司教様。来るとは知らず、いつも通り朝飯とコーヒーを飲んでて遅れた」

突如大声と共に部屋に入って来たのは、熊の様な大男。

頭の天辺に髪は無く、左右と後ろを巻く綿の様なくすんだ金髪が残るのみ。

ぎこちなくも軽快に歩くその右足は木製の義足。

木を打つ様な音を響かせつつ、前のソファに崩れる様に座り込んだ。

「相変わらずだね、職員は君より早く仕事をしていたが。それここは茶の一つも出さないのかい？」

「俺はこのギルドの長だ、皆より遅く出て来て早く帰るのが長の仕事だ。それと司教様…、知らなかったぜウチが喫茶店だったとは、神職の方は見えない物が見えるようだ」

大仰に天を仰ぐ仕草を見せるその男に、刃は一気に好感が持てた。まったくもって傑作なオヤジじゃねえか。

その掛け合いに、つい刃は嘖き出すと、まるでイチャモンをつけて来るスジ者の様に睨み。

「なんでえへんちくりんなあんちゃん、あんたも神のお言葉が聞こえる口か？」

「いや、すまん大将。なかなか傑作でね、悪気は無いし、俺は聞こえ無い声が聞こえる変人じゃ無い」

身体つきや見た目は悪役レスラーが、小綺麗なベストとシャツを着せたままだが。

中身は古参の万年軍曹のそれだ。

刃は昔の戦友を思い出す様な気持ちで、微笑のままギルドの長と向き直った。

だが彼は吐き捨てるかのように。

「まったく司教様よう、今日はなんなんだい。司教様も分かってると思うが、こんなヤバイあんちゃん連れてどうするよ。これもあれか、大いなる御心ってか」

優雅に座ったままのエスクに噛み付く。

「ふむ、分かるかジオバミ。彼を冒険者にしようと思ってね」

その言葉に一層顔をしかめ、苦虫をすり潰した様な顔で唸る。

「まったくこの平和な世の中に、よくこんな戦争屋が生き残ったもんだ。海賊じゃねえのはすぐ分かるが……。兄さんどこの戦場をフラついてた、ジークじゃねえし隣のラフレか。はたまたウロースかあ……」

「確かに戦場にいたが、此処よりはるか遠くだ」

刃は語る必要も感ず無いので、それなりに返す。

そう言うのと、ギルド長ジオバミは腕を組みまた唸る。

その頃になってようやく職員が、お茶を持って来てくれた。

ギルド長は今だ唸る中、エスクはゆっくりお茶を飲む。

一心に探る様な視線で、刃の頭から爪先を隅々まで見回し。

「……よし分かった。司教様、あんた様が保証人なんだろうね」

「ふむ、不足かね」

「司教様が保証人なら、月の悪魔でも大丈夫さ。おいあんちゃん、俺は此処いらジーク国の西側ギルドを束ねるジオバミ・C・マシトーラだ。大将でもギルド長でも好きに呼びな」

そう言って、ジオバミは野球グローブの様な右手を差し出す。

「世話になるよ大将」

刃もその手を握り、握手を交わす。

刃は微笑みつつ、ジオバミはニタリと睨め付ける様な笑い。

「「……………」」

2人は顔は笑ったまま、無言で熱い握手が続く。

部屋には太いロープが引っ張り合うような音が。

互いに薄ら笑いを貼り付け、握手が続く。

片方に汗が流れたその時、エスクがお茶のカップを置く音が響く。

「もうイイだろジオバミ、腕がもげるぞ。刃も放してやりなさい」
チラリチラリと視線を飛ばして、エスクがそう言う。

最後に刃がニツと笑い一段強く握り、放す。

「うんっぬう…」

握り混まれた瞬間、ついにジオバミの口から呻きがもれる。

赤く震える右手を引き、悔しそうに一睨みし、右手をさする。

刃はその睨みを、笑ったまま受け余裕そうにお茶を飲む。

「ジオバミ、彼の實力を見抜いて置いて勝負を仕掛けた君の慢心だ」

「……ふん！分かっていても勝負を掛ける！逃げるよかマシだ！それで、後の要件は」

痛む右手を抱えたままそう言うと、エスクが刃に目配せし、袋が机に置かれた。

靈藥王乳茸

靈藥王乳茸

机に置かれた袋から、刃が戦利品を出して行く。

「なんでえ、オーク討伐を出そうと思っていたが、必要無くなったな」

ジオバミは、一際大きなオークの尻尾。

マザーオークの尻尾を左手で掴んで呟く。

だが、次に出て来た物で、ジオバミは机を張り倒すように立ち上がった。

「こりゃ、おいおい、間違いいえ」

痛む右手でつかみ、マジマジとそれを凝視する。

それはオークの洞窟から持ち帰った、大きな王乳茸。

「なんか問題か大将？」

拾って来た本人は良く分かっていない、間違えて毒茸でも持って来たかと心配するくらいだ。

「やはりそうだったか、私達はあまり茸に詳しく無くてね。それが靈藥王乳茸かい」

エスクはたいした興味もなさ気に、驚きに目を丸めたジオバミに聞く。

「ああ、間違いいえぜこりゃ。2・300年に一度出てくる靈藥王乳茸だ。しかも一袋全部。あんちゃん、これで遊んで暮らせるぜ。何処で見付けた！」

「いや、そのオークの巣穴からだ。ただのデカイ王乳茸だと思って、そのデカイのだけとって来たんだ。普通のならその四倍有ったが」
詰め寄るジオバミを、軽くさばき、そんな大層な物だったのかと刃も驚いている。

「普通のなんぞこれに比べるりゃタダの茸だ。この靈藥を食べば、瀕死の年寄りが走り出し、死んで間も無い獣人は生き返る。特に人

間の寿命を100年伸ばし、身体は最盛期に戻るって一品よう。まあエルフやドワーフには効き目が無いらしいが」

それは凄いな、不老不死の秘薬みたいな物だ。

王乳茸じたいそれに近い作用を持っているらしいが、確かにこれに比べたら抗生物質程度か。

「ジオバミ、幾らになる」

あまりにレア物に、興奮をしているジオバミを宥めるように、エスクが本題を問う。

「おお、オークの尻尾は100g100Aで、マザーが100g500Aだ。問題が霊薬王乳茸だが、これはこの辺りだとザートス議長屋敷じゃねえと無理だ。額も額だが物もそうだ」

なんか召喚2日目でえらい騒ぎだなおい。

何処か置いてかれた感じの刃を残し、エスクとジオバミが二、三話しを進めて行く。

…そして。

「ふむ、彼等もザートスに帰るとこだ。丁度良いので馬車に乗せてやって来れ、私は連れを呼んで来るよ」

「なんだいあんちゃん、仲間いたのか。司祭様よう、まさかもう一匹こんなのがいんのか」

そう言って、実に嫌そうに刃を指差す。

多少こんなのや、指を刺されるのにムツとするが。

「彼の相棒はアヤだよ、幼年学校で見ただろ」

「えっ！あのアヤちゃんかい。よくあんたが許したな。あつ待てよ、倅が今年23だから、5下の子だったから…ああ、そうかいそれでな、いやはや司祭様が言うように時が経つのは早いねえ」

そう言ってデカイソファアに大仰に座り直すと、傑作とばかりに大笑いを始める。

だがその反面、一気に悲しみの坩堝に叩き落ちたエスクが、呪詛のようにぶつぶつと。

「何故です神よ、4歳から12歳の8年と言う年月も瞬く間だと言

うのに。4歳のあの無邪気で何も知らずただ笑みを振りまく天使達、食べ物や口の周りにくっ付けるあの笑顔。指についた蜜を舐める仕草、どれも策略としか思えないあの舌づかい。おお神よ、なぜあんなにも私の脳を狂わすのです」

「狂ってんのは自前だろ」

「まったくだあ、ガキの頃から知ってるが、未だに理解出来ん。おっと、登録証とオークの代金持って来るから少し待ってろ」

「了解」

未だに主義者が一人演説しているが、刃もジオバミも無視して各々の行動に入った。

結果オークの尻尾10kg1万A、マザーオークの尻尾1,5kg7千500A、合計1万7千500A。

気分的には安い牛肉とちよつと豪華な肉って感じだな。

それと金は紙幣と硬貨だった、1万A札に5千A札、千A札2枚に100A硬貨5枚。

登録証には名前を書くだけで終わった、後は後ろでトリップしてるエスクの仕事らしい。

「この後ギルドの書類と一緒に霊薬王乳茸も連絡用の馬車に乗せっから、おめえ等も乗ってけ。場所は乗り合い馬車の停留所、黒塗りの馬車だからすぐ分かるはずだ。それとオメエの冒険者登録証も馬車に乗る職員に渡しとくから受け取れ」

「そうか。いろいろ有難うな大将」

「なにこれも仕事だ、テメエみてえな面白いヤツなら何時でも歓迎してやる。また来るこつたな」

そう言って笑い合い、今度こそ普通の握手を交わした。

待ち合わせ

待ち合わせ

その後、話しが終わった後も未だにぶつぶつぶつと喋る主義者に、面倒になった刃が当て身を入れ一度気絶させる。

数分待つて再度衝撃を入れると復活した、まるでバグった電化製品だな。

牢屋で見ていた光景が、ここで役立つとは。

最初おもむろにエスクを気絶させた時は、含んだ茶を見事に吹き出したジオバミも。

「とっとと行ってくれ」

とあきれ顔だったが。

まあそんな事で、部屋を出てギルドの母屋を抜け、広く居心地の良い庭に出る。

「では、僕はアヤを呼びに行くが。どうする？」

「マヤさんに呼び止められるのも悪いし、この辺りで待ってるよ」

馬車を待たせているし、話し出したらお互い白熱しそうだしな、軍人勅諭とか。

「ふむ、それが賢明だ。ではまたな、ヤイバ」

「ああまた行くから、俺の装備の管理頼んだぜ」

そう言ってエスクと別れ、少し見て回る。

金も手に入ったし、ちよつとなにか買ってみよう。

ギルドを後にした俺は、観光者気分でふらふらと歩く。

玄関先を清掃する人達、青や黒のローブを着た集団。

一般的な服装は、布のパンツに泡色のシャツ。

アヤの様なジーンズはあまり見かけ無い、やはりジーンズは作業着扱い何だろうか。

ローブを着た集団は、黒いブレザーの制服、昨日見たフィーエと同じ服装だ。

青いローブは、何処ぞの金持ち坊ちゃんを着てそうな真っ白な爪入り制服。

海軍士官もあの制服に近いが、汚れが目立ってカレーが食えんと、知り合いが言ってたな。

途中果物を売っていた店で、洋梨に似た果物を見付けて買ってみた。一個60A、物価はよく知ら無いが、オークの尻尾がg100Aで売却だったから高いのか安いのか？

そんな事を考えながら、人混みを避けて歩いて行く。

徐々に人氣が無くなり、建物どうしが背を見せる路地裏。

ゴミ捨て場なのか、大きなブリキの容器に生ゴミを溢れ返している。

「さっきから何のようだ」

どうでもよさそうに、食べ終えた洋梨の芯片手に声を掛けると。

何処にでもいそうな、性根の腐った面したチンピラが道を塞ぐ様に二匹づつ。

前も後ろも、自分より弱い物専門な顔をして、下品な微笑を浮かべている。

「おうおうおうテメエが、ラッキーな坊ちゃんだろ。知ってだぜえ、劇レアな茸見付けたんだろ」

本当品の欠片も無い言葉使いで、じわじわと刃を取り囲み、距離を縮めて行く。

「そうだな、だがそれがどうした？」

「余裕ぶっこいてんじゃねえぞゴラァ！」

「痛い目あいてえのかボケが！」

「とっとと殺っちまおうぜ」

正に王道なセリフ、言葉を知ら無いのは仕方ないな、害虫みたいなもんだし。

狭まって来た距離はもう掴みかかれり距離。

刃は興味も無い顔で目の前のチンピラA（興味無いので容姿等割愛）を少し見て。

「うるせえゴッキー共が」

「ああん!？」

チンピラAが顔を顰めたその面に、刃は手に持っていた洋梨の芯を指で弾く。

それが眉間に直撃したその条件反射で、目を瞑ってしまうチンピラAの締まりの無いガニ股を、刃は思いつき蹴り上げる。

衝撃で跳ね上がり、中腰で股間を抑え、目玉と舌が飛び出したチンピラAの顎に、蹴り足を踏み込み腰で威力を増した掌底を打ち込む。無駄なく素早く潰す。

昨日のオークより汚らしい顔のチンピラB・C・Dが、一泊の間を置いて理解力皆無の頭でやっと事の始末を理解する。

その間刃は、舌を噛み切り窒息死間近のチンピラAを踏み越え前に出る。

ピーピー五月蠅いチンピラ共の聞くに耐えない言葉を流しつつ。

「いいから、かかって来い」

終始退屈そうにそう言うのと、左手で手招く。

沸点が限りなく低いそいつ等は、怒りに顔を染め、腰の短剣を引き抜き襲い掛かった。

短剣を振りかざし襲い来るチンピラB、そいつの懷に刃は滑り込むと、振り上げた右手首と顎を両手で押し開く。

そのまま絡みつく様に短剣を奪い、首を固定し、鳩尾に強烈な膝蹴りを叩き込み、苦痛で崩れるチンピラB。

その間にも距離を縮め、逆手に短剣を握ったチンピラCが振り降ろした短剣が、刃を襲う。

「ごわああ!」

降るわてた威力のまま、背後肩甲骨の下に、根元まで突き刺さった。振るわれた瞬間腰を捻って、掴んでいたチンピラBを間に盾てに捌く。

背中に短剣が突き刺さったソレを捨て、素早く間合いを詰める。

仲間を刺して動揺するチンピラCの内腿を、鉈の様な重く素早い下段回し蹴りで膝ま付かせ、降りて来た右頬を蹴り抜く。

明後日の方向に首が向くチンピラCの死に面を直視し、後ろで挙動不審に震えるチンピラD。

「ひっひひいいい！！」

とうとう怖気付いてチンピラDが脇目も振らず、石畳みに足を取られながら走って逃げ去る。

逃げ去るその背後に、刃は手に持っていた短剣を軽く反転させ、ぶん投げた。

二種類の音を携えた風が、チンピラDを追いかける。

水気が多い果物が潰れる様な音と共に、チンピラDの後ろ首に短剣が生えた。

謎の影

謎の影

苦もなくチンピラ共を返り討ちにした刃は、足元の死体に目をやる。血溜まりに没した一つ。

背筋からの一撃が致命傷だったのか、崩れたままのチンピラB。

その背中から短剣を引き抜き。

チンピラDが逃げようとした先、暗く先が見え無い路地を一睨みし。短剣ごと腕を振りかぶり、勢い良くぶん投げた。

短剣が高速回転しながら路地裏へ消えると。

「ぐへ、くつかかかか！何だ、気づいてちゃったあ？こりやあ悪かったよう。ケツケツケ」

甲高く耳障りな笑を撒き散らしながら、路地から2つの影。

「でもよ、オレのダチぶっ殺しておいて、この挨拶はねくよなあ」姿を表したのは、赤と黄色に染め上げたモヒカン男。

ひよろりとした長身と、白い肌が合わさり爬虫類的印象を受ける。

そのモヒカン男の後ろから、影の様に従うのが1人。

黒いボロ切れを頭から被り、ぽっかり空いた顔の辺りの穴から、赤く薄い光が2つ。

よく見れば、そのボロ切れが布越しに短剣を掴んでいる。

モヒカン男は短剣を受取、何度か眺めながら。

「黙るかよ、そうかよ。まあいいけど、なあフェティー。あはっ！はあ〜う〜」

そう言ってモヒカン男は黒いボロ切れにしなだれる。

「臭えな、臭う」

刃はさも機嫌が悪い顰めた顔で、憎々しげに言葉を漏らす。

その鋭い眼光は、モヒカンでは無く、後ろのボロ切れ。

しな垂れ、ボロ切れの中に手をつ込み弄っていたモヒカンも、よだれと高揚とした目で刃に振り返る。

「ああ、あは。匂うか、最高な匂いだろ。この熟しきった匂い。たまんねえ、さっきからいきり立ってたまんねえよ。フェティ、我慢できねえよう」

ボロ切れは直立に立ったまま、微動だにしない。

それでもモヒカン、突っ込んだ両腕を忙しなく蠢かせ、腰を擦り付けるモヒカンの卑猥さと畜生にも劣る羞恥の無さに、刃は汚物を見る目で口を歪ませる。

そして、とうとう彼は自分の大型ナイフを引き抜き。

飛んだ。

軽やかな音に反し、その速度は速い。

左右の壁を蹴り、高く空へ。

二階建ての建物を、安安と飛び越え、空中で姿勢を整えると。

急降下する隼の様に、逆手に握り直したナイフごと、真下の黒いボロ切れに突っ込む。

行為に夢中なモヒカンは、刃が飛び出したのにも気付いていない。

体重を乗せた大きな着地音を響かせ、刃が地面に降り立つ。

その切っ先は空を裂、奥へと跳んだボロ切れを睨む。

抱え込まれたモヒカンが、突然の出来事に目を丸くしているが。

鼻を鳴らし、ニタリと笑う。

「何だあ、生きの良い女抱えてんだなお前。昨日は抱えて寝たか、匂いが染み付いてるぜ。夜も散々楽し」

不快な笑みを浮かべるモヒカンの、戯言を最後まで言わせる気も無く。

滑り込むように横一線を放つ。

だが、またしてもボロ切れが素早く避け、建物の屋上へ消えて行く。

「まあいいや。物は馬車だし、次は遊んでやんよ。俺も4・5発抜いて来る、テメェも楽しんどけ」

そう言い残すと、耳障りな笑いと共に奴等の臭いは遠ざかって行く。1人路地に残された刃は、ナイフで回りの空を切り裂くように反転し、ナイフを鞘に収める。

「気に入らねえ臭いだ」

歩き出した刃の背後で、風が逆巻き空気が拡散される。
ほのかに残る科学薬品の独特な臭いも、共に流れて行った。

報告と任務

報告と任務

路地裏から影を縫う様に歩み出た刃は、ひとまずギルドへ戻り、路地裏での件をジオバミへ報告する。

「おいおい、あんちゃんよう。戦場から死神連れて来たんじゃないんだろな」

「コッチが死神に連れられた気がしてるんだが」

ジオバミと刃は、またあの豪華な客間。

ギルド長応接間で、2人は話していた。

受付で話す刃の雰囲気を読み取ったジオバミが、即座に応接間に引きずり込み。

大まかな話しの後、チンピラの死体が転がり現場に警らの人間を走らせ現状を確認。

そして。

「このチンピラ共な、近頃パツと出て来て散々かき回して行く奴等だな。三下はほぼ捨て駒だ」

ジオバミが警らの話しと、部下が持って来た書類を見てながらそう結論する。

「捨て駒なら身元が分かって、どの組織か分からないんじゃないか？」

戦場なら、身分証部隊証等。

何処の誰がこれを仕掛けて来たかを、その死体いや捕虜から漏れ無いようするもんだが。

「ああ、こいつ等何処から回って来たのか、麻薬の丸薬を食っててな。外に流通もしてねえ麻薬なもんで、すぐ分かった。ポケットにしこたま入ってたよ」

そう言うと、薄い水色の錠剤を摘まんで見せる。

「麻薬の丸薬てのは、一般的なのか？と言うかこう言った形状なの

か？」

そう刃が聞くと、ジオバミも目が一段細くなる。

「…何か知ってんのか？ こう言ったもんは支流は芥子しか無かった。やり方も水煙草みたいな仕方だ、こんな物ジークにゃ無かった。薬丸もウサギのクソみてえなもんで、麻薬の丸薬も、こんな石ころ見てえな薬丸も見た事ねえ」

ジオバミは探るように、腕組みし考える刃を睨む。

刃はその視線を真っ向から受け続け。

「大将、確かにこの錠剤に心当たりが有る。だがこの、丸薬は俺の国で流通していた物だ。それに、これ以上は確証が無い」

そう言うと、今度は刃からジオバミを観る。

またしても2人の間に沈黙がつづき。

「へったく！ 今回は、今回は報告と情報提供って事にしといてやる。それでだ、あんちゃんが言ってたトサカ頭と黒づくめだが、ろくでもねえぞ」

顔を突き出し、手に持った書類を刃に突き出す。

刃は渡された書類を見ながら、話し続けているジオバミの話を聞く。

「男の方は直ぐに分かった、なんせザートスでも有名な異常性欲者だったからな」

その話しはこう続いた。

トサカ男、名前をカターブル。

小さな時から小動物を殺しては、その死骸で遊ぶ生粋の気違い。

8歳で親から棄てられ、ゴミを漁る毎日。

数年後、酒に酔った娼婦を殺したが、ここからが酷い。

殺した娼婦で三日三晩、死体が腐るまで犯し続け、気付けば墓場に出没し始めた。

若い女が埋葬される度び墓を荒らし、その遺骸を辱め続ける。

だがそれも長くは続かなかった、墓守りがそれを見つけ、急いで警らを呼び捕縛された。

警らに殴り飛ばされるまで勤しんでいたカターブルは、そのまま広

場に吊るされ、市民から石打ちにあい、次の日は飢えたケモノの檻に放り込まれる予定だった。

だがそこに、あの黒づくめが現れ、カタールを連れ去った。警らの兵士や、激怒した教会関係者、市民の包囲を走って逃げ切る。

これが半年前。

それからつい二週間ほど前に、ザートス近郊やガンジでその姿を目撃され始めた。

最初の逃走後即座に、懸賞金付きで生死問わずの御触れがギルドにも出ている。

黒づくめに関しては名前がフェティ、その身体能力から獣人。

それも完全獣化であろうと言った憶測の情報のみ。

「まあそう言うこった、あんちゃんの物が目当てで馬車を襲うってんなら話が早い。うちも忙しくてな、腕に立つ奴は皆余所だ、警らもそれこそ数いねえ」

そう言う、懐から高級紙幣を10枚取り出し刃の前に突き出す。

「これはカタールの首代の半分、もう半分とギルド御用車の護衛代、合わせて20万A。こっちは成功報酬だ、無事が確認され次第送る、首無しなら0だ。まあ襲われ無かったら移動だけで小遣いや、仕事したら仕事分払ってやる」

「なら、有難く貰っとく。馬車はもう出れるか？」

「さっき出たから停留場で待ってるはずだ、相棒連れってとっとと行って来い」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5063v/>

黒い瞳は角付き

2011年10月9日09時20分発行